
この気持ちは恋なんかじゃない

大島 有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この気持ちは恋なんかじゃない

【Nコード】

N3418R

【作者名】

大島 有

【あらすじ】

直人は自他共に認める今どきの草食系男子。

女の子には積極的にアタック出来ない彼がひとめぼれ。

相手の凛は、顎のラインで切り揃えられたストリートボブ、切れ長の目とふつくらとした唇が魅力的なクールビューティ。

珍しく押しの一手で迫るが、彼女にはあっさりと断られてしまう。

？私、男の子が苦手なの。？

それでも諦めきれない直人は？

1話 ひとめぼれ

恋に落ちる瞬間。

たとえば言うなら、なんとしよう。

そう、そこだけが、彼女の周りだけが別の次元の空間のように、そこに佇む景色も、あの子を取り囲む空気さえも色をつける。

甘いワインを口に含んだような感触。

柔らかく、甘美で、ふんわりと花にも似た良い香りを放つ。

その瞬間。

予期することなく訪れる幸福。

そして僕を天国に、時には地獄へ突き落とす。

可愛いあの子。

でも、この出会いを感謝する。

すべての偶然に、そして、あの子と過ごすこの一瞬一瞬に。

ひと目惚れ。

そう、ひと目惚れだ。

ああ、ひと目惚れってこんな感じなんだ。

初めてだ。

こういう感じひと目惚れって言うんだな。

僕は、じつとその子の顔を見ている。

人様の顔を、それもうら若き女性の顔を、ぶしつけにまじまじ見るなんて失礼なことだとわかっていても、それでも視線をそらすことが出来なかった。

筋肉や筋や、体を動かすものに命令を出している脳のどこかの動きがストップしてしまったように、僕はでくの坊のようにぴくりと瞬きすら出来ず、彼女の顔をじつと見ていた。

顎のラインで丸く切りそろえたボブにふつくらとした唇。一重の切れ長の目がエキゾチックで、クールな感じのするきれいな女の子だ

った。

年はたぶん僕と同じくらい。

彼女がそこに座っているだけで、いつもの馴染みの店がまるで別空間だった。

彼女は友達と二人で飲みに来ているみたいで、隣に座った背の高いバレーボールの選手のようなスポーティな感じのする彼女は、その女の子より年長に見えた。腰まであるきれいに伸びたストレートヘアが印象的な美しい女性だったけど、僕の興味はボブヘアの彼女にまっすぐ向けられていた。

そこへ、トイレから戻ってきた誠二が、

「直、どうしたん？」

席に戻ってきた誠二の姿すら目に入らず、ぼーっと彼女を見ていた僕はびっくりして、

「別に。」

慌ててグラスに残ったビールをあおった。一気に飲んでむせて咳き込んだ僕の背中を、誠二はどんと叩き、

「なんか拳動不審だな。」

と、僕が今まで見ていた方向に視線を泳がせて、

「おっ。あんな子おったんか？気がつかなんだな。」

顎をしゃくった。

「きれいな子やな。」

やはり彼女は目立つ。

誠二も興味をひかれたみたいだ。

「どっち？」

と聞くと、

「俺、あのストレートヘアの方。お姉さんぽくっていいやん。」

誠二が目をつけたのは彼女の方じゃなかった。僕はちよつとほっとして、

「両方ともいいな。」

そうと言うと、

？行くか？？

誠二が目配せしてきた。

2話 アタック

よく来る居酒屋。テーブル席が5席と、6人も座れば一杯になってしまふカウンター。近所のオヤジ連中が主な客で、時折若い男女のグループが奥の座席を貸しきって飲んだり騒いだりしているけど、女の子の二人連れなんて珍しい。しかも上玉。

誠二は同じ会社の一個上の先輩で、仕事が終わるところやって二人で時々ここへ飲みに来るんだけど、今まであんな可愛い子がいることなんて一度もなかった。もっとも市の中心から離れたこんな田舎町では、しゃれた店もなく、若者が遊ぶような娯楽施設もない。だからきれいな女の子がうろうろしているシチュエーションなんてお目にかかったこともなく、出会いなんてほとんど皆無だ。

僕の学生時代の友達なんて結構社内で見つけるやつも多いけど、下水施設やマンホールポンプ場などの維持管理を主な業務にしているうちの会社は、現場で作業している野郎ばかりで、女性なんて事務の50歳も過ぎたおばさんがひとりいるだけだ。だから誠二もそうだけど、僕も一年前に友達の紹介で付き合っていた彼女と別れてからは全然女つけなしだ。

でも、誠二はうまいんだよな。こうゆう状況で女の子に声をかけるの。僕は気恥ずかしくて、女の子がいてもうまく声もかけられないんだけど、誠二は平気みたいで臆面もなく声をかける。気の利いたジョークなんか飛ばしてね。

背が180センチはゆうにあって、すらつとして彫りが深く、スマートな感じのする男だから、女の子も割りと誠二には気を許す。

ま、お手並み拝見するかと、誠二の行動を見てみると、やつはカウンターに行き、店員に耳打ちした後、手にサワーを2杯持ち、彼女らが座る奥の座敷へ向かっていった。

「お待たせいたしました。」

明るく声をかけ、紫色の液体が入ったグラスを勢いよくテーブルの上に置く。

「えっ。私頼んでいないわよ。」

ストレートの彼女の方が、高い声を上げた。

「もう、そろそろお代わりかなと、思ってた。」

悪びれもせず、笑顔を見せ誠二は2人の手にサワールのグラスを押し付ける。

「あなた、店員さんじゃないのね。」

店の店員全員がつけている店名入りの黒のエプロンを誠二が身につけていないのを見咎め、ストレートが続けた。

誠二は、

「ここの巨峰サワーうまいよ。ホントの葡萄使ってるからね。」

間髪入れずに口を挟むと、例のボブヘアの彼女の方が、その切れ長の目を誠二へ向け、クールに言い放った。

「彼氏のおごりなの？女の子を引っ掛けるには巨峰サワーが無難みたいね。」

わ、ちよっと幼いような可愛らしい外観とは裏腹にクールな表情を崩さずに、視線をふっと流す彼女のそのギャップに、僕は又がんとやられてしまった。

「あはは、どうかおごられてくれませんか？」

誠二がいつもの調子でおどけて見せると、意外にもストレートもボブの方も、にこりと笑顔を見せてくれた。

こりゃ、うまくいきそうかも、と誠二の背中が語っていた。それを見て、僕も自分のグラスを手に持ち、彼女らのテーブルに歩み寄った。

「すみません。僕の友達が何か悪さでも？」

そう声をかけると、ボブヘアが、

「あはは、2対2ね。そうゆうこと。」

すれたような口を聞いた。

彼女はさらに僕の目をじっと見て、

「ふうん。いいわ。どうぞ。」

座布団を押しやってきた。

近くで見ると、さらさらのストレートヘアーがきれいな輪を描いていて、細かい花柄のチュニツクから透けて見えるゴールドのタンクトップに胸の鼓動が早くなった。

どうして、どこで人は恋に落ちるのだろう。

それって、まったく自分が予想してもいない状況に、ホントに予期もしていない瞬間に、それはやってくる。ほんのちょっとした相手のしぐさや表情や、動いた時の空気の匂いや、風の流れや、ホントにちよつとした偶然の重なりに自分の心が吸い寄せられてしまうんだ。

僕はそんな風に感じていた。

彼女の隣に腰を下ろすのを、ちよつと躊躇してしまう。馬鹿みたいなんだけど、彼女から離れて、壁に近い角の席に腰を下ろす。彼女から一番離れた席に座った自分を、もう一人の自分が（あほやな。お前。）と言っている。だけどどうしようすもない。

僕の心は彼女の隣に、ぴつたり寄り添って座り、彼女の表情を目で追い、言葉を交わし、彼女が動いた瞬間に、むせるような息苦しさとともに感じさせる女性特有の花のような匂いを感じたい。

なのに、何故か心と裏波な行動をとって、離れた角席に座ってしまった。座ってからお尻が落ち着きをなくして、座り心地の悪い硬い公園のベンチに座っているがごとく、むずむずとしてきた。

が、じつところえておとなしくその席に落ち着くことにした。

3話 クールビューティ

誠二が何やら話し、ストレートが笑う。

ボブもつられて笑みを浮かべる。

僕はその3人のやり取りを頷きながら見ている。

（おい、直。）

誠二が目配せをする。僕が会話に入れずうろろと視線を泳がせているのを見るに見かねて、助け舟を出してくれた。

「こいつとはおんなじ会社でさ。な、直。」

「あら、そうなの。私たちもよね。」

そう、ストレートが言う。

「へえ、どんな仕事。どこの会社？市内？」

誠二が畳み掛けると、

「美容院よ。」

へえ、どうりでお洒落っぱいはずだ。今時の髪型。綺麗に手入れの行き届いた髪。

「美容師さんなんだ。ヘアスタイルがお洒落っぱいもんね。」

僕が言うと、

「女の子の流行って、興味あるの？」

ボブの方が僕に声をかける。

「会社は野郎ばかりで、女の子がいないんだ。いても事務のおばさんがひとりだから、女の子の流行ってよくわかんないんだけど、でも、ふたりとも髪がとても綺麗だ。」

女の子を褒めるなんて。よくすら出るなあ。

自分で自分を感心した。だって、本当の自分は誠二みたいに女の子とうまくしゃべれないんだ。

どっちかというと。

「そう。ありがとう。」

ボブが笑った。

それをきっかけにして、僕らは仕事の話や、休日に釣りやドライブに行った話や、いろんな話で盛り上がった。

別れ際、ふたりの名前を聞いた。

誠二は店の外でストリートにしつこくメルアドを聞いていたみたいだったけど、成功したのかな。

僕は、？アドレス教えてくれない？？

その一言が言えなくて、馬鹿みたいに思いつきりの笑顔で、彼女らの後姿に手を振るだけだった。

？馬鹿か。お前。？

？だって。？

？お前のために声かけてやったんだぞ。？

アドレスひとつ聞けなかった僕に誠二が悪態をついた。

？で、お前は？？

ストリートにアドレス教えてもらえたのか、誠二に聞くと、

誠二は苦い顔をして肩をすくめた。

「凜。」

「凜。」

「りんちゃん。」

歯を磨きながら、靴を履きながら、車を走らせながら、僕は可愛いあの子の名前を口にした。

聞けたのは名前だけ。

？家どこなの？美容院ってどこのお店？？

曖昧に笑って、僕の質問をはぐらかすボブヘア。

？今日はご馳走様。楽しかったわ。ありがとう。？

？名前くらい教えてくれよ。？

「凜よ。」

手を振ってストレートと腕を組み、僕らから遠ざかる彼女のすらりと伸びたサンダルの足を僕は黙って眺めるだけだった。

あの晩から、2週間。

僕は凜ちゃんを忘れられない。

誠二は、いいかげんにしろよ。確かに上玉だったけど、あんだけガードが固いんじゃないよ。もしかしたらうすくないよ。

呆れた様子で僕の頭を小突く。

？仕事だ。仕事。？

軽トラに機材を乗せて現場へ走る。

ああ、また仕事。今日も仕事。つまらないなあ。

仲間とわいわいと、でも真剣に取り組む現場での作業がいつもは楽しく充実した時間なのに、彼女に出会ったあの晩のときめきに比べたら、何もかもが色あせて、つまらない。

4話 偶然

そんなある日。

天は我を見放さない。やっぱりいつもじいちゃん、ばあちゃんの仏壇を参ってるからかなあ、なんて僕は思った。

隣町に仕事に行った帰り、何の気なしに駅前の本屋に立ち寄った。薄グレーの作業着のまま本の包みを抱え、本屋を出た僕の目に飛び込んできたのは。

「あ、あんなところに！」

気がつかなかった。こんなところに美容院があるなんて。

隣町にはほとんど用事がなく、ましてや車を止めるのが困難な駅前になんて立ち寄らないから気がつかなかったけど、本屋を出たホンの鼻の先に、白とシルバーグレーでさっぱりとまとめられた今時ふうの美容院が建っていた。

そのガラス張りの店の中で、凜が客の髪をカットしているのが見えたんだ。

僕は発作的に、その店のドアを押した。

「いらつしゃいませ。」

受付に立っていた小柄な若い女性が、社交的な笑みを浮かべ僕を出迎えてくれた。

「あ、あの。」

「ご予約を頂いていますでしょうか。」

客と間違えられた。そりゃそうだ。美容院に何しに来るって、髪の毛を切るなりパーマをかけるなり、髪の手入れに来るのが普通だ。

「いや、予約は。」

そう言つと、

「少しお待ち頂ければ、スタッフが空き次第……」

受付の彼女は続けた。

「待つてます。待つてます。」

「ご希望のスタッフがいらっしやいますでしょうか。」

そうか、その手があったか。僕はひらめいた。

「彼女を。凜さんをお願いします。」

窓際の席で客の相手をしている凜を指差した。僕の声は上ずっていったんだろうか。受付の彼女が少し小首を傾げたようにみえた。が、気を取り直したようにカウンターのノートを広げ、

「西脇でしたらこの後すぐにあきますので、お待ちください。」
笑みを浮かべ、彼女は待合のソファを僕に勧めてくれた。
やった。

心の中でガッツポーズ。

そうか、西脇さんっていうのか。西脇凜。
いい名前だ。

ひとりほくそ笑む。

あ、でも駅前に止めてある会社の軽トラ。

まあ、いいか。張られないだろう。

が、この作業着。

汗臭いかな。

自分の脇の辺りの匂いをかいでみる。

ま、しょうがないか。

僕はお洒落な店内に不似合いな自分の薄グレーの汚れた作業着が気になった。

でも、何もかも条件が揃ってるなんてないもんな。でも、まあ良かった。

早く凜と話したい。

カットしてもらって、シャンプーしてもらって、その間に何とか。

僕はすばやく頭の中で、彼女に持ちかける話題をあれこれ考えた。

「お待たせいたしました。」

受付の彼女が声をかけてきた。
待つこと30分。ついに彼女に対面。
あの夜から3週間が経っていた。

「お待たせいたしました。どうぞ。」

椅子を引きながら僕の顔を見、凜はあつという顔をした。

その表情は驚きとも、嫌悪とも取れる。少し気が引けたが、気を取り直して思いつきり明るい声で、

「ごめんね。突然。」

笑った。が、彼女のちよつと戸惑ったような表情を見て、身が縮んだ。

「迷惑かな。」

椅子に座りながらそう尋ねると、

「いいえ。だつてお客様だから。」

鏡の中の凜が笑顔を作って見せた。

「お客様か？」

まあ、いいや。

5話 空振り

「どうされます?」

ヘアスタイルを聞かれて、

「任せるよ。短めにして。」

だって、何も考えてないし、先週床屋にいったばかりだし。

凜は、夏らしく短めにそろえますねと言い、僕の髪の毛に櫛を入れ始めた。

彼女の柔らかい手が僕の髪を触っている。

それだけで、呼吸が荒くなりそうだ。

髪の毛を切ってもらいながら、鏡の中の凜を見つめる。

綺麗に顎のラインでそろえたボブの毛先が、はさみの動きと共に微かに揺れる。

今日はシフォンの薄い長袖のブラウスに黒の細身のパンツ。

クールビューティ。

その言葉がぴったり来る美人だ。

?どうして、このお店がわかったの? ?

凜が小声で尋ねてきた。

「偶然だよ。」

?ホントに? ?

凜が微かに眉間にしわを寄せて返してきた。

「ホントだよ。」

思わず声が大きくなってしまった。店の客が僕の方を振り向く。

だって、ストーカーみたく市内の美容院という美容院を張り込んでいたのかと、勘違いされたら嫌じゃないか。僕は女の子に対してそんなに粘着質じゃない。

連れの中には、別れても諦めきれず、何度も元カノにメールしたり、

その子の会社の前で張り込んでいたりするやつもいるけど、あんなのと一緒にして欲しくない。

もっとも、女の子が嫌がることをするなんて最低だ。そうまでして、その子を物にしたいとは思わない。こういうのってやっぱり縁だしね。

そう縁だよ。

だって、偶然なんだから。

この店を見つけたのは。凧に再会したのは。

仕事でこちらに来て偶然見つけたのだと説明すると、少し疑わしそうな表情を残したまま、だけど納得したように凧は頷いた。

「で、まだ仕事中的なの？」

やばい。そうだった。

ポケットの中の携帯の着信を見ると、会社から何度も着信が入っていた。

現場から戻るのが遅すぎるからだろう。

やばい。

誠二にメールする。適当にごまかしといってくれって。

「駄目でしょう。仕事中なのに。」

凧は鼻先でふっと僕を非難した。

「だって、このチャンスを逃すと、また君に会えるかどうかかわからないだろう。」

凧は返事をしなかった。

「ありがとうございます。」

例の小柄な受付の彼女が、店のポイントカードと共に、僕におつりを渡し、玄関先のドアのところで見送ってくれた。

振り向くと、鏡の前で凧は次の客の首にケープをかけているところだった。

6話 あきらめきれない

「あゝあ。収穫なしなあ。」

会社の軽トラのハンドルを握りながら、大げさに叫び、誠二は僕の方を同情したように悲しそうな視線を投げてよこした。

僕は黙って、窓枠に身を乗り出し、風に吹かれる。

「おい、何とか言えよ。」

「ああ。」

「会社にはマンホールポンプの調子が悪くなって、点検していたんだって、ごまかしといてやったからさ。」

「・・・ありがと。」

誠二がごまかしてくれたおかげで、僕はサボって美容院に行ったことはばれずに済んだ。

だけど、今朝に比べて髪が短くなっていたのは一目瞭然だろう。

「ほら。着いたぞ。」

「ありがと。」

会社の駐車場に着き、自分の車のドアロックをはずす。

「飲みに行くか？」

誠二が気を使って声をかけてくれた。

「うん。いい。まっすぐ帰って寝る。」

僕は落ち込んでいた。

カットしている間の35分。何とかして、次の出会いに持ち込もうとあれこれと凜に話しかけるのだが、どれもこれもつれない返事。

「今度またあの4人で飲みに行かない??」

「メールしちゃ駄目かな。アドレス持つてるよね?」

「仕事何時に終わるの?お茶くらい駄目かな?」

彼女にとっては職場だからあまりしつこくも言い下がないし、僕も変な客だと摘み出されても困るから、カットが終わると大人しく

料金を払い店を後にしたんだ。

誠二に話すと、笑う、笑う。そんなに笑わなくても。

？直みたいないな大人しいやつが、よくそこまでやったよな。俺、感心する。褒めてやるよ。？

？結果はどうあれ、チャレンジしたことに意義ありだよ。ま、女の子なんて星の数ほどいるんだからさ。がっかりするなよ。また何かあったら誘うからさ。？

確かに女の子をナンパしたこともない。しつこく付きまとったこともない。

駄目そうな子には最初から行かない。

確かにハングリー精神には欠けてる。今流行の草食系男子って僕のことだろうな。

その僕があそこまで大胆に食い下がったのは、凜が初めてだ。

それほど、彼女は僕の心に突き刺さった。彼女の存在が今の僕のすべてだ。

心を占めている。何をしてもどこにいても、彼女が僕の中にいる。

凜に会いたい。

その思いがああ駅前の、あの美容院の店先に向かう。

が、通りの向こうの本屋からばんやりシルバーグレーの店内を覗き見るだけだ。

だって、あれだけしつかり拒否されたら、もう客のふりをして店を覗くことすら出来ない。そこまでやったら、やっぱりストーカーだ。さてさてどうしたものか。

7話 思わぬ出会い

そんなある日。

雨の帰り道。

会社を出て、車を走らせる。国道の広い道から、家に向かう細い県道に右折したところでハザードランプをつけたメタリックの小型車が止まっているのが見えた。

日産のノート。女の子がよく乗っている車種だな。

パンクでもしたかな。

慎重にそのメタリックの横を通り過ぎようと、スピードを落とし、ふと何の気なしにメタリックの歩道側を見ると、見覚えのあるボブヘアが傘から覗くのが見えた。

（凜だ。）

僕はすぐさま車を脇に止め、メタリックへ走った。

凜は、携帯を手にし、どこかへ電話をかけようとしているところだった。

彼女は僕にすぐ気がつき、困ったような顔をして携帯のフラップを閉じた。

「どうしたの？車。」

凜は黙って後ろのタイヤを指差した。

「あゝあ。」

やっぱりパンクだ。歩道側の一本がへこんでいる。

「JAFは？」

「入ってない。」

「行きつけのディーラーとか。」

「ない。」

歩いていける距離にディーラーも、自動車屋も見当たらない。

さて、どうしたものか。

「スぺア積んでる？」

凜は頷いた。

この雨の中付け替えるのしんどいな、と一瞬思ったが、凜の為だ。

僕は、後ろのトランクから工具を使って、スぺアタイヤをはずして脇に下ろした。

「替えてくれるの？」

「一本くらいならすぐだよ。」

凜は、申し訳なさそうな顔をして、タイヤを替える僕に傘を差しかけてくれた。

ジャッキで車体を上げ、パンクしたタイヤをはずす。

その間中も雨脚は静かになることもなく、降り続ける。彼女が傘を差しかけてくれたおかげで、かろうじて頭だけは濡れなかったけど、背中からズボンまでびしょ濡れだ。

15分ほどでスぺアを替えて、つぶれたタイヤをトランクに放り込む。

「スぺアだからね、ちゃんとしたのに後で替えてよ。」

そう言い残して、立ち去ろうとすると、

「ちよつと待つて。」

凜のちよつと冷たくも聞こえる涼やかな声が僕を呼び止めた。やった。

心の中で叫びながら、振り向くと、

「お礼がしたいんだけど。」

凜は近くでお茶でもどうかと言ってきた。

「うん、嬉しいんだけど。」

この格好じゃな。びしょ濡れのTシャツを脇で絞りながらこの後の展開を算段した。

びしょ濡れだけど、このチャンスに物をにせずして何とする。僕は思い出した。

「車に着替えがあるから、ちょっと着替えるよ。」

会社の帰りにジムに寄ることがある。ので、車のトランクにジム用のＴシャツとジャージを積んであることを思い出した。

備えあれば憂いなし。

僕が着替える間、凜は自分の車の中で待っていた。その間に、雨も小振りになってきた。

「おまたせ。どこへ行くのか。」

凜はその場からほど近い距離にあるお洒落なカフェの名前を告げた。僕らは、お互いの車でそのカフェまで行き、初めてふたりきりで向かい合った。

間近でみると、睫が長くて、色が白くて、やっぱり髪がさらさらで、本当に凜は綺麗な子だった。

ウェイトレスがカフェラテをふたつ置き、お辞儀をして去っていった。

「よく来るの？この店。」

「そうね。ひとりでまったりしたい時なんかだね。」

「へえ。」

ひとりで窓際の席に座り、カフェを飲みながら本なんかを広げる凜の姿を想像した。ざわざわと騒がしいおしゃべりな同年代の女の子に比べて、その姿は大人っぽく、ミステリアスで、僕の胸のざわめきがまた激しくなった。

8話 男の子が苦手なの

「この間はごめん。急に店に行ったり、しつこく連絡先なんか聞いたりして。」

凜は笑みを浮かべて、首を振った。

「今日は助かったわ。ありがとう。」

凜は礼を言った。

「これに乗じて恩着せがましく、また誘ったりすると嫌がられるかと思うんだけど、僕、どうしても君のことが忘れられなくて。」

パンクを直したことを逆手にとって、凜に恩を着せてるみたいに取りれたら嫌なんだけど、僕も必死だった。

凜は俯いた。

「彼氏がいるのかな？はつきり言ってくれば僕もあきらめるんだけど。」

そう言うてから、この場で面と向かって彼氏がいるといわれたら、またまたへこむだろうなと、気持が沈んだ。あのつぶれたタイヤみたいに。

「彼氏はいないけど。」

「ホント。」

僕は胸を撫で下ろした。

「僕、タイプじゃない？」

凜は困ったように、首を傾げて、

「そうじゃないんだけど。直人くん、いい人だとは思っけど。」

？直人くん。？

凄い。名前覚えてくれてたんだ。それだけで天にも昇るような気持ちだった。

凜は、カフェラテのカップを手で包み込んでじっと考えた後、慎重に言葉をひとつづつ選びながら話してくれた。

？男の子が苦手なの。？

彼女が言うにはこうだ。

男の子は自分を所有物のように扱う。家にいるのかとか、誰に会っているのかとか、逐一メールで確認される。それが嫌。どこに行こうと、誰と会ってしようと、私の勝手だし。自分について来い、みたいな態度をされるのも嫌。着ている服や、付き合っている友達、いろんなことに干渉されたり、そんな考えは女らしくないとか。どうして彼女になると、所有物みたいに自分の思い通りにしたいと思うの。

私は私。そんなふうに踏み込まれるいわれなんてないし。

「そりゃひどい。」

僕は頷いた。きつと凜が前に付き合ってた彼氏なんだな。今時、化石みたいな男だ。

「それで、男は懲り懲りだって？」

凜は迷ったように、気まずい顔をして頷いた。

「だから、今んとこ、誰とも付き合う気がないの。直人くんだからとかそういうことじゃないのよ。」

？ごめんね。？

そう付け加えて、凜はカフェのレシートを手にした。

「あ、いいよ。ここ僕払うよ。」

「だって、お礼にならないわ。パンク直してもらって、お茶おごってもらったりしてたら。」

僕は凜の手から、レシートをもぎ取った。

「じゃあさ、ワリカンにしようよ。」

「ワリカン？」

いいわ、私がおごるわよ、彼女はなおも僕の手からレシートを取り返そうとした。

その手を押し返し、

「対等な関係ってどう？」

僕は凜の目を見た。

「対等？」

「うん。」

「友達としてつきあうのっていうのは駄目？」

口にしてから、何言つとんじやと、自分で自分を殴りたい心境だったんだけど、アホみたいにそれでも凜と繋がっていたかった。

「友達？」

凜は疑わしそうに上目遣いで僕を見た。

「男だったら彼氏だけだとは限らんじやない。僕みたいな頼れる男友達が一人いてもいいんじゃない？」

凜は笑った。

頼れるか。僕みたいな草食系男子、頼れるわけないよな。

だけど、凜が笑ったのはそういうことじゃなかった。

「ホントに友達としてしかつきあえないわよ。」

？そんなことを言う男の子なんて初めてよ。？

凜が笑ったのは、僕みたいな男が物珍しかったからだとわかったのは、カフェで彼女の車を見送った後だった。

9話 夜店の金魚

「気持ちいい。」

凜はご機嫌だ。

ここは隣の市中心部にある159タワー。

名前の由来はただ単に1590Mあるタワーだからだって。

15Fの展望台。凜は顔をガラスに押し付けるようにして外を眺めている。

ガラス越しに、遠くに広がる町並み、遙かかなたには霞がかかった山の稜線、そしてその向こうには遠くI湾が広がる。

「あれ、双眼鏡？見たら。」

僕は100円入れて5分の双眼鏡を指差した。

その方が遠くまで見えるだろう。

「ううん。いいの。こうやって広く高いところから眺めるのがいいの。気持ちが晴れるわ。」

凜と僕は休日を利用して、ドライブがてらこの159タワーまでやって来た。

まるでこうしていると普通に恋人同士なんだけどなあ。また、女々しい思いが顔を覗かせる。

だって、今日だって友達との約束をキャンセルされた凜が、思いついたように僕を誘い出しただけで、別に僕じゃなくても良かったのかもしれないじゃん。

まあ、いいけど。

凜の楽しそうな横顔を見たら、何でもよくなってきた。

「下でアイスクリームでも食べる？」

僕は聞いた。

「そうね。」

エレベーターで下に降りながら、

「直人くんは高いところ嫌い？」

「別にそうじゃないけど。」

僕が展望台のガラスに近寄らなかったのを、目ざとく見ていた凧がそう聞いて来た。高所恐怖症なのがばれたら、やっぱりかつこ悪い。「私ね、高い所大好きなの。なんか嫌なことがあると高い所に登りたくなるのね。それで、高い所から景色を眺めると、何か胸の辺りがすっきりして、晴れ晴れとした気持ちになるの。」

凧は、アイスクリームスタンドで、ベリーとチョコのソフトを頼みながらまくし立てる。

「嫌なことあったの？」

ふふ。別に。大したことじゃないわ。

凧は僕の分のミントチョコを手渡しながら、ベンチに誘った。タワーの下ベンチに腰掛けながら、僕らは一緒にアイスクリームを舐めた。

アイスクリームを舐める凧の赤い舌先を、ちらりと盗み見る。変な想像が僕の頭を駆け巡る。いや、いかん、いかん。友達だったわけ。

「話したらすっきりするよ。」

僕がそう言つと、

「いつも直人くんに聞いてもらってるし、悪いわ。」

「別に構わないよ。」

凧とはあれからちよくちよく食事に行ったり、お茶を飲みに行ったりした。

女性の多い職場は苦勞が多いのか、酒なんかが入ると、凧は僕に少しの愚痴をこぼしたり、相談を持ちかけるようになった。ちよつとは信頼されてるみたい。

「私ね、うまく感情を表現できないの。ボキャブラリーが少ないのかな。」

確かに凜はちよつとぶつきらばうなところがある。それが可愛らしい外見とミスマッチで、また何ともいえない魅力なんだけどな。

「思いついてから自分の内で咀嚼して出さないから、言葉が乱暴になつてしまい、うまく相手に伝わらないの。」

前の職場ではいじめにもあつていたらしい。

「女の子ってね、ま、自分も女なんだけど。」

と、凜は前置きして、先日職場でのトラブルを僕にこぼしてきた。

後輩の女の子に、お客さんへの接客態度の悪さをちよつと指摘したらしい。そうしたらその後輩がむくれちゃつて、その不機嫌さが半日顔に出てたらしい。それをまた注意したら、その子が、凜の上のスタッフに告げ口して、今度は凜が注意されて大変だったらしい。

「後輩には優しく、噛み砕いてアドバイスしてあげて、だつて。」

彼女はやれやれといったように首をすくめて、ため息をついた。

「感情的になるのが嫌。女はね。特に仕事場で感情的になられるとうんざり。」

「ははは。わかるような気がするよ。どっちかっていうと、男はさっぱりしてるからな。言われてもその場だけで、後まで引きずらないもん。だつてそんなことしてたら仕事が回らなくなるしね。」

「でしょ。」

あのパンクの夜から2ヶ月。凜と友人としてだけど、付き合いだしでからわかったことがある。凜はどっちかっていうと男っぽい。さはさはしてるっていうのかな。言葉遣いもぶつきらばうだし、言葉足らずだし、だけど、さっぱりしていつきあつていても気持ちいい。女の子特有の甘えとか、ねっとりした部分がなくて。だけど、その性格とは裏腹なその女性らしい美しい外見。そのギャップがまたそそるんだよな。

いや、いかん、いかん。変な想像は。

「何か、生きにくいよね。なんだかうまくいろんなことに馴染めないってゆうのか。」

「そう、夜店の金魚みたいね。」

「夜店の金魚？」

アイスクリームスタンドの脇には、夏のイベントとして金魚すくいが催されていた。小さな子供を連れた親子連れで結構にぎわっていた。ソフトの皮の薄っぺらいすくい網が破れるたびに、親子の楽しそうな嬌声が辺り一面に響いていた。

「金魚ねえ。」

すくった金魚を小さなビニール袋に入れてもらい、子供たちは嬉しそうに袋を下げ、親と手をつなぎ、場を後にする。

「あれね。」

凜は親子連れの後姿を指差した。

「袋に半分くらいしか水が張ってなくて、子供がちゃぷちゃぷ持って歩いていると、身体が水から出てしまい、息が苦しくなつて。するとまたいい具合に水中に戻れて、ほっと息をついたり。子供の歩くスピード、取り扱いの仕方、それで息が吸えたり、吸えなかったり。しかも、子供がどう動くのか予想がつかないし。」

凜の言うことがわかるような、でもしっかりとその言葉の裏側にある真相まではわからず、曖昧に僕は頷くしかなかった。

10話 通天閣で

「まあ、そんな感じよ。」

凜は、ソフトの包み紙をゴミ箱に捨てに、席を立った。

その時、ゴミ箱の横の大きな観葉植物の鉢植えの枝に、彼女が来ている長袖ブラウスの袖のリボンが引っかかった。

「待って。」

僕は立ち上がり、凜の袖に引っかかった枝を払ってやった。

「ありがとう。」

僕は不思議に思った。以前からそうだ。

夏なのに、凜はいつも長袖を着ている。今日も、薄いブルーの模様が入った長袖のシャツをタンクトップの上に羽織ってる。

「暑くないの？」

僕は凜の腕を指差した。

「冷え性なのよ。夏場なんか特にクーラーでやられちゃうから。」

ふうん。そんなものかな。確かに女の子って冷えるんだよね。

うちのおかんも、クーラーの風は冷える、冷えるって、夏でも靴下履いてるもんな。

「それよりさ、直人くんって元々ここの辺の人なんだよね。」

「ああ。」

「凜ちゃんは大阪だったよね。」

「うん。」

僕らはタワーを出て、横の噴水の周りを歩きながらおしゃべりを続けた。

「通天閣って行ったことある？」

「通天閣かあ。有名だよな。行ったことない。」

というか、名古屋のテレビ塔も、東京の東京タワーも僕にはきつと縁がない。だって高所恐怖症なんだから。

凜はまだ僕は高所恐怖症だということに気がついていないらしかった。

「浪速区の新世界にあるの。うちの実家のホント近くなの。よく行ったわ。休みって平日でしょ。美容院って。いつも観光客がいっぱいなんだけど、土日比べたら空いてるわ。上の展望台から景色を見るの。西には南港やUSJ、六甲山も見えるわ。北に向かって、難波や梅田の町や日本橋、それから大阪城。生駒山に東には倍貴山、天王寺の駅までぐるーっと大阪の町を眺めるの。」

凜の目には遠く大阪の景色が映っているようだ。離れていても故郷の景色ってすっかり覚えていたものなのかな。

「あそこから見ると大阪の景色、好きなの。気持ちがすっきりする。大阪でも嫌なことがあると、よく登ったわ。」

「凜ちゃんは、高い所がないと駄目なんだ。」

「そう、頑張れないのよね。」

フフフ、でも、結構高い所っているいろいろあるのよね。山や展望台なんかもいいよね。

彼女はそう付け加えた。

「でも大阪が、いいな。道頓堀でたこ焼き食べて、吉本見て、アメリカ村ぶらぶらして、そして通天閣か。」

「でも、通天閣はね、カップルで登ると別れちゃうっていう噂があるの。」

「へえ、そんな噂があるのか。」

じゃあ、駄目じゃん。

そう思っていると、

「でも、直人君とは友達だから全然大丈夫よね。」

あ、そう。やっぱり友達だよな。

僕はちよつとがっかりした。期待しているわけじゃない。

いや、やっぱちよつとは期待している。

だけど、面と向かって？友達だから？なんて言われると、がっかり

して力が抜ける。

「あ、私なんか変なこと言った？」

笑みが消えた僕の顔を見てか、凜が困ったような顔をして聞いてきた。

「あ、ううん。全然。」

「そう。」

僕は話を変えようと、

「地元には帰ってるの？」

「あまり、帰ってないわ。」

「家族は？」

突っ込みすぎかな？

「母がひとりで美容院をやっているわ。」

へえ、親子揃って美容師か。

「いつか、お店継ぐの？」

凜は、噴水の周りを歩いていたら歩を止めて、

「ああ、そうか。あまり考えたことなかったな。先のことって。」

僕も立ち止まり、考える。

そうだなあ、自分も先の事ってあんまり考えたことなかったな。

社会に出て4年目。高卒であの会社に入ったから、今年で22歳になる。

凜は僕より1個下。21歳。

毎日、あれこれといろんなことがおき、楽しいことに目を奪われ続け、日々が過ぎる。

自分ももっと年をとって、結婚したり、子供が出来たり、会社で地位があがったりとか、そんな先のことや、もっと先に何がしたいかとか、そんなこと、まだまだわからない。し、考えたりすることもないもんな。

凜は噴水の水が流れるのを見てる。

凜はどうなんだろう。
年下だけど、僕より大人っぽく見える彼女の横顔をちらりと覗き見る。

11話 何か妬けるな

凜が空を仰いだ。

「雨降りそうだね。」

雲行きが怪しくなってきた。西の空の方が真っ黒な雲に覆われ始めた。

「そろそろ行こうか。」

僕はこの後の算段をした。夕ご飯はあの店で、その後は。

駐車場へ向かおうとしたその時、凜の携帯がなった。彼女は僕に断り、携帯を取り出した。

僕は彼女が電話を切るのを、噴水脇のベンチに座って待っていた。すると、

「直人くん、ごめんね。」

携帯のフラップを閉じながら、凜が

「翠が、用事が済んだらしいの。彼女と一緒に食事をする事になってるから、ここで。」

え、聞いていないよ。

翠さんというのは、あの例のストレート。居酒屋で一緒に飲んだあの綺麗なお姉さん。

凜と同じお店の美容師さん。しかも何故か凜と一緒に住んでんだって。

ルームメイトっていうやつ。

家賃の関係か？

ま、いいけど。

「うん。わかったよ。」

僕はしぶしぶ頷いた。砂肝の美味しい焼き鳥屋に連れて行こうと思ってたのに。

凜はすまなそうに胸の前で手を合わせ、？ごめんね。？ともう一度

頭を下げた。

用事が出来てキャンセルされた相手って、翠さんか。

「いいよ。翠さん来るまで一緒に待ってようか。」

そう言うのと、

「うん、ありがとう。でも、もうそこまで来てるらしいから。」

そういう彼女と一緒に、タワーの園の外まで出ると、白のクーペが
停まっている。

いい車だ。カッコいい。

感心して見ると、

「直人くん、ごめんなさい。」

運転席から翠さんが降りてきた。

ストレートのさらさらヘア。麻の上質なジャケット。ゴールドのバ
ングル。

綺麗な人だな。自分より確か5歳上だった。大人の魅力だね。

そんなことを思っていると、

「じゃあ、今度また4人で飲みにも行きましょう。」

誠二を入れてまた場を設けようということらしい。

僕は頷き、二人を見送った。

助手席に座った凜の嬉しそうな顔。僕が見たことのないような思い

つきの笑顔。

何か妬けるな。

何で？

女の子同士でつるむのって、苦手だなんて言ってるのに、翠さんと

はべたべたなんだから。

どうしてかな。変なの。

翠さんが理由ですっぽかされたのって、これで3回目だ。

何となく腑に落ちなくて、凜のために予約しておいた焼き鳥屋に誠
二を呼びつけた。

「ははは。お前、ようやってるよな。」

グラスの中ジョッキを一気におりながら、誠二は僕を馬鹿にしたような口調でしゃべり始めた。

酔ってんな。こいつ。

「何が。」

「だってさ、やれもしない女と付き合って何が楽しいんだよ。」

「誠二！」

「だってホントのことじゃん。」

そんなこと、わかってる。友達としてだなんて、馬鹿みたいだ。うな垂れた僕の表情を見て、誠二は声のトーンを落とし、

「ごめん。ごめん。そう落ち込むなよ。」

僕の肩に手を回した。

「直の気持もわかるよ。それだけ好きなんだろ。友達でもいいからつきあっていたいんだろ。」

僕は黙った。

友達か。僕だって健全な男子だ。凜にキスしたい。その肩を抱きしめたい。それ以上のことだって。だけど、凜は僕を信頼している。友人だと。

手なんか出せない。出したら僕らの関係はそこで終わりだ。だけど、本当はそれとは違う気持を持っている。

希望。こうやって友達として付き合っていくうちに、僕のことをもっとよくわかってくれて、いつか僕のことを異性としてみてくれるんじゃないか。

いつか、遠い未来かもしれないけど、凜が僕を恋人として受け入れてくれるんじゃないかって。

誠二はねぎまを頬張りながら、

「いつか凜ちゃんがお前のことを、彼氏としてつきあってくれようになるといいんだけどな。」

「うん。」

かすかな希望か。

「ま、全く希望がないわけじゃないんだし、もうちょっと頑張るか。」

「？おやじさん、生中お代わりね。？」

誠二が声を張り上げる。

「僕も！」

「？よし、飲むか。？」

誠二が笑った。彼の豪快な笑い声に、少し気持が和んだ。

12話 夢

ヒヤシンス？金木犀？

ふと甘い香りがした。

凜がつけている香水の匂い。

そう、覚えてるこの香り。

その香りに鼻をくすぐられた次の瞬間、柔らかい感触が性器を包み込んだ。

ねつとりとして暖かいそれが、僕のをゆつくりと舐めまわす。

「あ、ちよつと、おい・・・」

目を開けようとするが、眠くて瞼が開かない。

眠くて仕方がないのに、あそこだけはつきりとその甘い感触を感じている。

その柔らかい舌が、ゆつくりとそして徐々にスピードを上げて、僕を締め上げていく。

すぐに僕のそれは大きくなり、得もいわれぬ快感が全身を包んでいく。

？誰？？

「ああ、ちよつと駄目だ・・・そんなに、あ、ああ。」

うまい。おかしくなりそうだ。

呼吸が荒くなる。

僕を銜えているその人物を確かめようと、下半身に手を伸ばすのだが、何故だか手が届かない。

すぐにピークがそこまで見えてきた。

「あ、もう・・・」

？出そう。？

そう思った瞬間、僕の下半身に顔をうずめた人物が顔を上げる。
？気持ちいい？直人くん？

「凜！」

凜だ。彼女の柔らかい髪が僕の下腹部に触れたと思った瞬間、目が覚めた。

？夢？？

「夢か。」

僕はベッドの中で、ひとり間の抜けた声を上げた。

カーテンの向こうから、鈍い朝の光が透けて見えた。

顔を上げたときのあの凜の表情。エロい。あんな顔するんだ。

あ、いかん。想像だけでまたいきそう。

下半身に湿ったような変な感触を覚えて、そっと手を伸ばす。

あゝあ、濡れてる。どうも、やつちゃったらしい。

？夢精するなんて、中坊以来だよ。？

あんな夢見るなんて、やっぱり無理があるのかなあ。

好きで好きで、今すぐにでも押し倒したい女の子と、友達ごっこや
つてるからかなあ。

なんだか、情けない思いで洗濯機に汚れたパンツを放り込んでいる
と、

「直人！今頃洗濯なんか出さないでよ。」

おかんの叱責が飛んだ。

不意打ちを食わされた猫のように、全身で飛び上がらんばかりにび
っくりして、振り向くと、

「何で今頃洗濯出すの。夜のうちに出不さいって言うてるでしょ。」

僕を押しつけ、洗濯機に手をつ込む。

「ちよつと、ちよつと。」

驚いておかんの手を掴んだが、おかんはそれに構わず洗濯機の中の
僕のパンツを掴み、

「ははん。おぬしも若いのう。」

おどけたように笑った。

「もう、いいじゃんか。」

むっとして言い放ち、その場を後にしようとする、またおかんが僕の腕を掴み、

「まあいいわよ。元気な証拠じゃない。」

と言い、

「それより、譲兄いの所までお使いに行ってくれない。」

と僕の顔を見た。

「またさくらんぼ？」

「そう、綾子のところに持っていこうと思って。」

綾子というのは、僕の8つ上の姉だ。

もう何年か前に嫁いで隣町に旦那と3歳の子供と3人で住んでいる。おかんは時々、綾子ねえのところへ遊びに行く。孫会いたさにだけどね。

そんな時に、譲兄いの作るさくらんぼのケーキをよく持っていくんだ。

13話 名物マスター

「いらつしゃい。」

アンティークの飾りが細かく施されたガラス戸を押すと、譲兄いのよく通る少し甲高い声が聞こえた。

「譲兄い？」

店の中に入り、カウンター越しに声をかける。

「直ね。ちよつと待ってて。」

店の奥から譲兄いが答える。

僕はカウンターの椅子に腰掛けて待つことにした。

カチカチカチカチ・・・

店の入り口に置かれたアンティークの掛け時計が、ゆっくりと時を刻む。

？ 静かだな。？

この時間、店内には客がひとりもいなかった。

マリオネット、ビロードとスパンコールで作られたピエロのマスク。ガラス細工の花が盛られた花瓶。バラの細工が施されたオルゴール。店に飾られたそれらを見ていると、時が遙か昔に逆戻りしていくような錯覚に陥る。

僕はカウンターの椅子を降りて、ゴブラン織りのソファに身を沈める。

譲兄いの店。

アンティークの家具と雑貨でまとめられたカフェ。

店の売りは、個性的なマスターと、さくらんぼのケーキ。

僕が子供の頃から譲兄いはこの店をやっている。

譲兄いとおかんが何故か気が合うらしく、もう長年おかんは2日に一回はこの店に来て、入り浸っている。

おとんが気を揉まないかって？

それは全然問題なし・・・

「おまたせ。」

譲兄いがケーキを乗せたトレイを持って、店の奥から顔を出した。

「ありがと。後でおかんにお金持ってこさせるわ。」

ポケットを探ったが財布を忘れた。おかんも僕にお金を預けなかった。

「あら、いいわよ。和ちゃんにはいつも会っから。」

和ちゃん。おかんの名前、和子だ。

「それより、何か飲んでく。」

「あ、嬉しい。」

僕はまたカウンターに座りなおす。

そして、カウンター越しに譲兄いの今日の服装をチェックする。

「譲兄い。そのパンツってちよつといたくない？」

「あら、何が。ぴったりよ。」

10年前から体型が変わらないのは感心するけど、その襟にフリルのついたシャツに、黒の皮のベスト。そしてぴちぴちの恐ろしくスリムな革のパンツ。

先の尖ったブーツ。襟足をちよつと長めに伸ばした髪の毛をオールバックにし、鼻の下に伸ばした髭。サリーちゃんのパパを連想するよ。その髭。

名物マスター。

僕も最初はその風体が気味悪かったけど、ついでその女言葉も。だけど、譲兄いはすごく気さくで優しく、いつも明るい。

中坊の時なんか、学校で嫌なことがあると、いつもここで譲兄いに聞いてもらった。今はそんなに悩みを聞いてもらうこともあまりないけど。でも、何かあると譲兄いに会いたくなる。

「あんまり最近来ないわね。仕事忙しいの？」

エスプレッソのカップをカウンターの置きながら、譲兄いが聞いてきた。

「でもないけど。」

ははん。デートで忙しいとか？

僕は曖昧に笑ってごまかす。

胸を張ってデートで忙しいのだから。だけど、言えない。

凛とはよく会ってるけどそれはデートじゃない。ただの友達。会ってもその髪の毛一本すら触れることは許されない。

僕はまたあの夢を思い出してため息をついた。

14話 まさかね

かちゃん。

その時、ドアを開ける音がした。

「あら、修一おかえり。」

「あれ、店人中、閑古鳥だね。」

修一兄ちゃんだ。

「直。ひさしぶり。」

修一兄ちゃんが、細い指で僕の髪に軽く触れる。

大きな紙袋を抱えた修一兄ちゃんが店の奥に消えると、僕は聞いた。

「ホントに独立しちゃうの？」

「準備は着々と進んでるわ。」

譲兄いが答える。

修一兄ちゃんはずっと譲兄いと、この店をやってきたんだけど、こことここでこの店を辞めて自分の店を持つ予定なんだ。

元々修一兄ちゃんは腕のいいパティシエで、市内の大きなホテルでチーフを務めていたんだ。そのホテルで勤めている時、譲兄いと知り合いホテルを辞め、この店を2人でオープンした。そしてこの土地で長年一緒にやってきたんだけど、修一兄ちゃんの元々の夢であったケーキ屋をやることになってこの店を去ることになったんだ。

「寂しくないの？」

僕は譲兄いに聞いた。

「寂しいわよ。だけど修一の夢だからね。応援しないとね。」

譲兄いは、寂しそうに微笑んだ。でもその表情はどこかさばしたようにも見えた。

「だって、プライベートでは一緒だからね。それは変わらないから。」

「そうだね。」

2人でしゃべっていると、奥から、白いシャツに着替え黒のギャルソニエプロンをつけた修一兄ちゃんが出てきて、カウンターの流しでカップを洗い始めた。

修一兄ちゃんは、譲兄いと違って寡黙で、殆どしゃべらない。ただ陰気な感じはちつともしなくて、いつも穏やかで優しそうな眼差しで辺りを見ている。派手で個性的な感じの譲兄いとは対照的で、いつも白いシャツや地味な感じのポロシャツを着て、長く伸ばした髪の毛をひとつに結んでいる。彼は細くて背が高いので、襟足を長めに伸ばした髪型が良く似合っている。

洗い物をしている修一兄ちゃんに、譲兄いは何やら話しかけている。手を止めて譲兄いに顔を向けて、頬を緩めた修一兄ちゃんの肩に、触れんばかりの距離で譲兄いが話し続ける。至近距離で視線を交わすふたりに何故かドキドキした。

（いつも見てんだけど。何でかな？）

こういう光景はいつも見ている。子供の頃からね。

ふたりがそういう仲だって気がついたのは中学生の頃だけど、いつもこんな調子だから、こんな光景もそのうち慣れっこになった。

だけど、エスプレッソをすすりながら、ふたりを見ていた僕の頭に浮かんだのは、凜と翠さんのことだった。

仲の良い二人。

まさかね。

譲兄いと修一兄ちゃんは10年来の恋人だ。

譲兄いとおかんが仲良くても、おとんは心配しないよってのはそういうこと。

男と男。

世の中にはそういう組み合わせもある。

ということは、女と女の組み合わせっていうのもあるんだよね。

いや、まさかね。

ふと浮かんだ変な考えを追い払おうと、僕は立ち上がった。

「もう行くの？」

譲兄いが振り向いた。

「ごちそうさま。これ以上いるとおじゃまかなって思つて。」

「何言つてんのよ。子供のくせに変な気を使わないでよ。」

譲兄いが笑つた。

「子供じゃないよ。もう22歳なんだからね。」

僕は振り向かず、挨拶代わりに片手をちよつと上げ、そして店を後にした。

15話 泣いてる

「ああっ。」

おかんの地を這うような叫び声にびっくりして、テレビのリモコンを落としかけた。

「何だよ。へんな声出して。」

時計は11時を指している。そろそろテレビを消して、二階の自室のベッドへ潜り込もうとしていた僕は、おかんの突拍子もない叫び声に非難の声を上げた。

「だって、明日お父さんが飲む牛乳がないんだもの。」

前髪に拳大ほどの大きさのカーラーをふたつ巻いたパジャマ姿のおかんが、冷蔵庫を覗き込んでいる。

「切らしてるもんしょうがないじゃん。」

僕は気にも留めずそのまま階段を上がろうとした。そこへおかの鉄拳が飛んだ。

「痛て。何だよ。」

「ちよつと直。角のコンビニまでひとつ走り行って来てよ。」

「え、もう寝ようと思ってたのに。」

僕は口を尖らせた。

「だって、お母さんもうパジャマだし。あんたまだ服着てるし。」

「そりゃそうだけど。面倒くさいなあ。」

「親父なんかお茶かコーヒーでも飲ませておけばいいじゃん。」

「駄目よ。朝はイチゴジャムのトーストに牛乳って決まってるんだから。」

うちの親父は融通が利かない。判で押したように毎朝同じメニューを食べ会社に行く。変わったモン食べると電車の中で下痢するんだってさ。ホントかな。牛乳の方が腹くだりそうだけど。

「わかったよ。」

僕はしぶしぶおかんから受け取った小銭を短パンのポケットに突

っ込み、サンダルを引っ掛けて玄関を出た。

近くのコンビにまでは歩いて数分。住宅街を抜け、大きな通りま
で出るとすぐに光々とした明かりが見えてきた。近くにあるのでよ
く利用する店だ。

キーパーからいつものMミルクを取り出し、レジでお金を払う。
釣りをポケットに突っ込み、店を出ると、どこかで見たようなメタ
リックのコンパクトカーが止まっている。

ナンバーを確認すると、おや、こんな所で、こんな時間に。
凜だ。

僕は車に近寄り、運転席の人影に目をやる。
何の考えもなしに、運転席の窓を手で叩くと、びっくりしたよう
に彼女は顔を上げた。手には携帯。誰かにメールしていたみたいだ。
彼女は窓を少し開けた。

「こんな所で何してるの？」

僕は偶然彼女に会えた嬉しさに、明るくそう声をかけた。

「うん、ちよっと。」

答えた彼女の声のトーンが低いことに気がつき、その顔を良く見
ると目が赤く腫れていている。

泣いていたのかな。

声をかけてまずかったのかと、少し後悔したけど、腫れた目に気
がつかないように声のトーンを高くした。

「これ、買いに来てさ。家、近所なんだ。」

牛乳が入ったビニール袋を掲げてみせる。

「そうなんだ。」

凜は窓を少し開けただけで、降りてこようとしないので、やは
り間が悪かったのかと思い、その場を後にしようとした。

「メールしてたんだろ。ごめん、邪魔して。」

「じゃ、行くわ。」

そう言っ^てコンビニの駐車を歩いて通りに出た。数歩歩いて、足が止まった。

気になるな。泣いてた。

僕は、余計なお世話か、迷惑かとも思いながらも、先ほどのコンビニの駐車場にとっ^て返した。メタリックはまだ停まっている。僕は助手席側に回り、もう一度窓を叩いた。

凜が顔を上げる。僕は車の外から助手席のシートを指差した。

？開けて。乗せて。？

凜はロックをはずして、僕を車内へ招き入れてくれた。

16話 夜中のドライブ

「ごめん。何か気になってさ。」

凜は僕の顔を見た。駐車場の明かりの下、彼女の表情がよく見えた。戸惑っているふうでもなく、何か気が抜けたようながっかりしたような顔だった。

「何かあったの。」

「……」

「余計なお世話かな。」

凜は首を振った。そして、急にキーを抜くと、僕に手渡し、

「直人くん、運転して。」

そう言って、運転席を降り、助手席側に回った。

「え。」

時計を見た。11時半。おかんは牛乳を待っているだろう。僕は戸惑ったが、彼女の言うとおりにし、運転席へ移動した。

「ちょっとドライブしよ？」

彼女の言うまま、ハンドルを握り、夜の国道を南へと向かっていった。

「どこ行く??」

「どこでも。直人くんに任せる。」

任せるって言われても、牛乳買いに來ただけだから小銭しか持っていないので、店に入るわけにも行かないし、それより何より免許持ってきてないんだけど。無免許運転だ。でも、凜の顔を見たら何も言えなかった。思いつめたようにじつと窓の外を凝視している。一言もしゃべらず。

仕方ないので、郊外の外れによく僕らがドライブする峠がある。高台に展望台もあるから、そこから町の夜景でも眺めれば凜も元氣

になるかもしれないと考え、国道へ出た。

沈黙が流れる中、深夜のラジオのDJの声が甲高く響く。

気まづくなつた僕は、凜に声をかけた。

「何かあつたんだろ。僕でよかつたら話せよ。」

数分の沈黙の後、凜が口を開いた。

「翠が、店を辞めるって言つた。」

また、翠さんが。

彼女の話題になると、僕はなぜかしら嫉妬にも似た気持になる。

凜があまりにも翠さんの事を話題にあげるからだ。仲の良い先輩なのはわかるけど、ちよつと執心しすぎなんじゃないかな。もしくは僕が女性に嫉妬することがおかしいんだろうか。だけど、そんなことは顔には出さず、僕は話を続けるように言つた。

「Rサロンって知ってる？」

？Rサロン？県内を中心に展開する美容室のチェーン店の名前だ。

市内にも何件か店舗がある。

知っていると口にする、

「翠が引き抜かれたの。今度新しくオープンするJ店の店長につて。」

「へえ、凄いいじゃないか。自分の店が持てるんだね。」

僕はあまり知らないけど、翠さんって凄く腕がよいらしく、今の店でもトップの売り上げを誇る。あの店の約半数以上の客が翠さんを指名する。全国で行われる美容コンテストでもいくつかの賞を取っているらしい。

J店は隣のサロンで、来月オープンを控えている。Rサロンの中でも、大きな規模の店だ。

「翠さんが店を辞めるから寂しいの。」

聞くと、軽く頭を下へ下げた。

僕は、譲兄いと修一兄ちゃんのことを思った。店を出て独立する修一兄ちゃんに、寂しいけど修一の夢だからと、笑つた譲兄いの表

情を思い出した。

17話 コイビトナノ ミドリハ

「寂しいだろうけど、喜んであげなよ。だって翠さんの夢なんだから、本当に仲のよい友達なら喜んであげなきゃ駄目だ。」

いつぞや、彼女の夢は自分の店を持つことだって、凜から聞いていた。

「そうだけど・・・」

語尾が消え入りそうになり、またぐずぐずと泣き始めた。そして、涙で途切れ途切れになりながらも、彼女は声のトーンを高くしながら話続けた。

「それだけなら私も大喜びで、翠を応援するわ。だけど・・・」

「別れたいって言うの。Rサロンのオーナーとできてたなんて。あんまりだわ。」

「別れる??」

「オーナーとできてる??」

僕は言葉の意味が理解できず、

「別れるって、凜と?」

凜は頷く。その意味を考える間もなく、凜が続ける。

「翠はRサロンのオーナーとつき合っているの。アパートも出て、オーナーが用意してくれたマンションに住むっていうの。私を置いて。」

言葉尻がまた涙声になる。

「置いてく??」

「大げさな。置いてくとか、別れるとか。友達なんだから。男と女じゃないし、いつまでも友達は友達だよ。凜と住んでいるアパートを出て、そのマンションに住むのも、そっちの方が新しい職場に近いからなんじゃないの。それにオーナーさんとできてるなんていうのもどうかな。翠さんは綺麗だし、有能だし、彼氏のひとりやふたり

いたって不思議じゃないじゃない。」

僕はてつきりオーナーって男だと思ってそう言った。その言葉に反応して、凜は顔を上げてはつきり言った。

「友達じゃないの。恋人なの。翠は。」

「コイビトナノ。ミドリハ。」

え、えええ。

咄嗟に僕はハンドルを切り、路肩の空きスペースに車を止めた。

「聞き間違いか？」

鼓動が早くなる。凜の顔を見た。凜はもう泣いていなかった。真

っ直ぐ僕の方を、挑戦的とも思えるきつい眼差しで凝視した。

「恋人って言った？」

「恋人って言った。」

オウム返しに凜が繰り返す。

困惑した。そして気まずい沈黙の中で、数秒の間をおき、僕は理解した。洪水のようにいろんな思いや情報や言葉や、そんな諸々のものが僕を悪戯に弄ぶかのように、押し寄せてきた。

18話 僕の胸で泣いて

？男の子が苦手なの。？

そういう意味か。頭の中でカウンターを挟んで、修一兄ちゃんが譲兄いに顔を近づけて、オーダーを伝えている光景が浮かんだ。

ありえん。

いや、ありえるんだ。

彼らふたりのことがなかったら、僕は理解できなかったかもしれない。もしくは、脳が理解することを拒んだかもしれない。でも、ありえん話であって欲しかった。

あまりのショックに茫然自失。でも、僕がショックだったのは、彼女の恋人が女性だったことではない。

そういうことじゃない。そういうことじゃないんだ。

凜が僕の目を見た。彼女の目を見るのがつらかった。だけど目を逸らさずに彼女を見つめ続けた。何故か、ここで目を逸らしてはいけないと思った。声をかけようと思うのだが、言葉が出てこない。真夜中の国道を走る大型トラックが僕らの車のすぐ脇を、物凄いスピードで走り抜ける。

照らされたヘッドライトに浮かぶ凜の表情が、崩れた。口の端を歪めて、眉間に皺を寄せた。そして、次には怒ったような泣き出しそうな、どちらともつかない表情を見せ、そのままドアのノブに手をかけた。

「凜！」

勢いよくドアを開き、凜が国道へ飛び出した。

僕は慌てて車から飛び出し、凜の後を追った。

早い。

彼女は驚くほど足が速かった。

短パンにサンダル姿の僕は、サンダルの鼻緒に引っかかりそうになりながら、必死に彼女の後を追った。ぺたぺたとなるサンダルの音がうつとうしかった。

「凜。ちよつと待ってよ。」

息を切らしながらも、何とか彼女に追いつき、その手を取った。腕をとられた凜は、今までの勢いを感じさせぬほど憔悴きつた様子で、その場に座り込んだ。

彼女は泣いていた。

僕は人がこんなふうになんて泣くようにして泣いているのを、初めて見た。

あまりにも悲しい。もつと、激しく声を上げて泣けばいいのに。そのほうがすつきりするだろうに。僕はそう思った。

凜は何故こんな時にまで、ひっそりと誰にもわからないほど小さな声で、苦しみに喘ぐように泣くのだろう。誰にも遠慮せず、誰に聞かれてもいいのだと開き直れるほど、悲しみやつらさを表に出せたら楽だろうに。そんなふうに見える泣き方だった。

僕はそつと彼女の身体を引き寄せた。嫌がられるだろうか。男に身体を触られるのは。

そう思ったけど、彼女を抱きたかった。

誰かの胸で泣ければいいと思った。少しでも悲しみが減るように。凜は僕の首に腕を回した。小さな子供のように。

僕らの脇で、車が遠慮なしに通り過ぎる。好奇心目で、ゆっくりとスピードを落とし、無遠慮に僕らを覗き込むドライバーもいた。だけど、僕はそのままの姿勢で、じつと凜が落ち着くのを待った。凜が悲しいときに、一緒にいれて良かった。

それが僕でよかった。恋人じゃないけど。友達だけど。それでも。ただそう思った。

19話 中央フリーウェイ

「こうやってバイパスを歩いていると、ユーミンの歌を思い出さないか？」

「例えば？」

腫れて真っ赤になった目をこちらに向けた凜が尋ねる。

「中央フリーウェイとか。」

「どうゆう情景？」

「ま、中央フリーウェイじゃなくてもいいんだけど、こうゆうシチュエーションってユーミンの歌に出てきそう。」

「真っ暗な国道を恋人に振られて、とぼとぼといや、半分やけになつて歩いていると、スピードを上げたトラックが否応なしにビュンビュンと、自分を追い越していくんだ。トラックの風圧で倒れそうになったりして、それが何だかいやに気持ちを逆なでしたりして、惨めな気持ちになっちゃったりして。」

凜は聞いた。

「振られてバイパスを歩いたことあるの？」

「いや、振られたことはいっぱいあるけど、真夜中にやけになつてバイパスを歩いたことはないよ。」

「ふうん。」

今まさに振られて歩いているんだけどね。君に。

僕は凜の横顔を見た。凜は真っ直ぐ前を見て歩いている。

あ、そうか。凜も一緒か。振られた者同士か。

「悲しい時って、あまりにも悲しすぎたりするとやけになって、どうでもよくなっちゃったりするんだよね。」

「でも、ありがとう。一緒にいてくれて。」

凜は下を向いたまま、誰に言うともなしにそう呟いた。

僕は何だか泣きそうになった。

凜がこのまま、歩こうと言った。車は置いて、あの展望台まで歩こうって言った。

もうちょっとで、例の峠に入るゲートが見えるはずだ。

だから、こうやって歩いている。ふたりで。

それが、少しでも君の慰めになるだろうか。そして僕の慰めにもなるだろうか。

ゲートが見えてきた。

国道を脇に反れて、細い県道を少し入ると、その展望台の入りが見えてくる。ここは付近の若いカップルが土曜の晩なんか、ドライブによく訪れるところなんだ。僕もデートで何回か彼女を助手席に乗せ、よく来たっけ。ま、一年以上前のことなんだけどね。

20話 ただの友達

「あれ。」

凜がすつとんきょうな声を上げた。

「どうしたの。」

凜が前方を指差す。

「あれ、何でだろう。」

ゲートの門がしまっている。展望台に続くドライブウェイの上り口にしっかりと門が鍵をかけられて、聳え立っていた。

「いつも開いてんのに。」

理由はわからない。ドライブウェイの途中で何か工事でもしてるんだろうか。

凜は、ゲートの門に手をかけてつまらなそうにつぶやいた。

「高いとこ登ったら、元気になれるかもしれないって思ったのに。」

そうだな。凜は高いところが好きだもん。こんなときだもん、僕だって凜を高い場所に連れて行ってあげたかった。

「車取ってこようか。Nパークウェイにでも行く？」

僕は隣町にあるドライブウェイの名前を挙げた。あそこにも高台にちよつとした展望台があったはずだ。

凜は首を振った。

「いい。」

そしてそのまま地べたに座り込んでしまった。

「服汚れるよ。」

「いい。」

カーキ色のハーフパンツの足を抱え込むようにして凜は力が抜けたように、がっくりと身体を海老のように曲げて顔を伏せた。僕も彼女の隣に腰を下ろした。

「ここでちよつと休んでから帰る。」

「翠さんのところ？」

凜は翠さんと同じアパートの部屋だ。

「帰れない。翠の顔なんて見れない。」

「そうだな。」

「直人くん。」

凜は顔を上げて僕の顔をじっと見つめた。

「もう少し、ここで一緒にいてくれない。」

「いいよ。」

胸が痛かった。どうしてそんな目で僕を見る。いつもちよつとクルでひんやりとした眼差しで僕を見るのに、今日は何故そんな傷ついた小動物のような目で僕を見る。どこかに助けを求めるみたい。愛おしくてたまらない。このまま、君を抱けたらいいのに。君を連れてどこか遠くへ行つてしまえたらいいのに。

「さつき、言ってしまったてからしまったって思ったのよ。これで私、直人君を失くしちゃうんだなって。」

「失くしちゃうって。しまったって何を。」

僕は聞いた。

「翠のこと、恋人だって。こんなこと言ったらもう直人くん、友達でいてくれないんじゃないかって。」

「ああ。」

僕は少し考えて言葉を選んだ。だけど、いの一番に本音が口をついて出た。

「ショックだよ。ショックだった。」

「やっぱりそうだよ。女同士だもんね。」

「そうじゃないよ。ああ、好きな人いるんだって。やっぱり僕はただの友達なんだって。」

「ごめんね。」

凜は俯いた。

謝られたことに少しショックを受けた。

？タダノトモダチ？

自分で言つて、自分で傷ついている。アホか。

そして、凜が謝ったことで、そのことは事実として確定してしまつた。

そう、僕はタダノトモダチ。

彼女は気づいているんだろうか。僕の胸の内を。僕が友達面して君の側にいて、でも本当は心の底で何を思っていたか。何を望んでいたのか。

次の言葉を探したけど、うまく言葉が出てこなかった。沈黙に耐え切れず、黙り込んだ凜の手をそつと取った。彼女は驚いたように顔を上げたが、その手を拒もうとはしなかった。

凜が今思いを巡らせている事は、何か。

緑さんのこと。同性の恋人がいることで、僕に何か思われているんじゃないかと、彼女は心配しているのかもしれない。

21話 リストカット

「あの、うまく言えないけど、凜のこと変だっと思わないよ。」

「本当。」

僕は、譲兄いと修一兄ちゃんのことを話した。

「ああ、そうなんだ。直人くん、免疫あるんだね。」

凜はちよつと冗談ぼくそう言い、笑顔を見せた。

そして、そつと長袖のブラウスの袖をまくり、僕の顔にその左腕を近づけた。その左腕の肘から手首までの間に、無数の蚯蚓腫れのような赤い古い傷があった。

僕はシヨックで、言葉が出てこなかった。

リストカット。

その傷を隠す為、いつも長袖を着ていたのか。

「それって。」

「大阪にいたときの傷なの。」

「大阪？」

「うん。」

凜は、聞いて欲しいといった。大阪にいた頃のことを。

僕は黙って頷いた。

「自分って変なのかなあって、思い始めたのが中学に入ってからだった。」

中学に入ってからすぐのホームルーム。隣の席になった子とすぐに仲良くなった。明るくてよく笑う子で、音楽とテニスが好きで、すぐに誰とでも仲良くなる朗らかな女の子だった。凜も、スポーツが好きだったからすぐにその子と意気投合して、部活も同じテニス部に決めた。学校では隣の席で朝からずつと一緒に。放課後も部活と一緒に登下校も一緒にだった。

「楽しかったの。その子、麻衣ちゃんって言ってね。いつも一緒にだ

った。」

休みの日には、ふたりで映画を観に行ったり、お互いの家を行き来したりした。

「でも、麻衣ちゃんは明るくて誰にでも好かれる子だったから、他にも仲のよい子がたくさんいて、その子達と遊んだりもしていた。何故か、それがとても嫌で。どうしてそんなふうに思っのかわからなかった。」

？それってやきもちってこと？？

僕が聞くと、

「そうかな、今から思うとやきもちだったんだよね。」

「でも、そのくらい普通なんじゃないの。野郎同士ってやきもちとかそんなやかないけど、女の子同士って結構そういうのあるじゃん。うちの姉貴にも、似たような経験があるみたいだよ。話し聞いたことあるもん。」

そうフォローすると、

「でも、その思いがどんどん大きくなって行って、ちょっとでも麻衣ちゃんが他の子と話をすると、何か泣きそうな気持になって。彼女にそういうことを言うと、凜、変だよって。何故私が他の子と仲良くしちゃいけないのって、喧嘩になって。」

「いつも麻衣のことばかり思ってた。頭の中、麻衣のことで一杯になって、勉強も部活も手につかなくなってる。私、おかしいのかな、何故麻衣のことにこんなに執着するんだろってわからなくて、混乱して。」

凜は、その頃のことを思い出してなのか、悲しそうに口を歪めた。
「その麻衣ちゃんとはどうなったの。」

続きを聞こうとすると、彼女は遠くの月を見るような遠い目をして、

「ある日、彼女に触れてしまったの。」
？え。？

僕は聞いてはいけないことを聞いたみたいに、少しの罪悪感みたいな居心地の悪さを覚えた。だけど、ここは本当は聞いてあげないといけないんだと、わかっていた。彼女をどこまで受け止められるだろう。不安で胸が震えた。

22話 やっぱり私は変？

部活が終わった後。テニス部のロッカールーム。凜と彼女のふたりだけ。他には誰もいない。テニスウェアを脱いだ彼女の身体から放たれる甘い体臭と汗の匂い。結んだポニーテールの後れ毛が白いうなじに張り付いて、それを見た凜は衝動的に彼女の身体に手を伸ばした。裸の上半身を、自分の身体へ引き寄せて、彼女の唇に触れた。自分の唇で。

鼓動が早くなる。凜の顔が見れない。どこに視線を置いたらいいのかわからず、僕は意味もなく視線を忙しげに動かした。

「麻衣はびつくりして、走ってロッカールームを出て行っただわ。私はそれを追いかけることすら出来なかった。自分がしたことが自分で理解できなかったから。ただ、それは頭で考えたことじゃなくて本能みたいなもの。麻衣が欲しくてたまらなかった。それがホントに自分が望んでいたことなんだったわかった。だけど、その気持ちを持った自分が怖くてたまらなかった。」

彼女の心の奥深くのところまで来てしまったらしい。

「その後、どうなったの。」

僕は動揺を隠して、さりげないふうに聞こえるように声のトーンを落とした。

「麻衣はそれから、私を避けるようになって。私も自分のしたこと、麻衣への気持ちが悪くて、麻衣を真っ直ぐに見れなかった。あんなに仲良かったのにどうしたの？ってみんなが聞いてきたけど、理由なんていえない。麻衣がいつあのことをクラスのみんなに話すのかって、毎日びくびくしてた。だけど、麻衣はそのことを誰にも言わ

なかったみたい。」

それから、少したって進級の年を迎え、凜と彼女は別々のクラスになった。

「麻衣のことは、友達の延長っていうのかな、あれは仲良すぎて、それで麻衣を独り占めしたくて、あんなことをしたのだろうって、自分で自分を納得させようとしていた。だけど、あの時の麻衣の白い首筋や、小さな胸のふくらみや、そんなものが忘れられなくて、そこに手を伸ばしたいって思っている自分がやっぱりいて。」

「自分で自分が怖くて、自分のことが嫌いでたまらなかった。」
凜ははき捨てるように言った。

「いいよ。正直に何でもいいから話したいだけ、話してごらんよ。」
僕は精一杯の思いで、凜の手を握った。凜の手が震えていた。

凜は頷いて、

「だけど、やっぱり自分は変なんだってわかったのは次のクラスでもそうだったから。」

「そうだったからって？」

「みんながクラスの誰君がかっこいいとか、彼女いるのかなとか、休み時間になると男の子の話ばかり。でも、私は何故か男の子に興味を持てなかったの。確にかっこいい子とか、スポーツの出来る子、頭のいい子、女の子にもてる子はいろいろいたのね。だけど、どの子にもかっこいいとか、いいなあとか、そういう思いがもてなかったの。」

「そうなんだ。」

「なんだろう。代わりにクラスの女の子に、麻衣に似たような感じの子がいたら、その子ばかり見てたり、話かけにいたり、その子がすることが気になったり。ああ、麻衣のことがあるから、まだ忘れてないからかなあと思ったけど、だけど、決定的だったのは、2学期に転校生の女の子が入ってきて、その子と仲良くなったんだけど、その子に対する思いが、麻衣のときと同じだった。ただ友達と

して仲良くつていただけじゃなくて、その。」

凜が言いよんだ。

「触れたいとか、自分のものにしたいとかそういうこと。」

僕は言いにくいことを口にした。そして、自分の中学生や高校生の頃のことを思い出した。女の子の裸ばかり想像してた。クラスの好きな女の子が着替えてるところとか、お風呂に入ってるところとか。そんなことばかり。そしてその身体に自分が触れているところ。キスした。それ以上のことも。想像の中で。

23話 誰も知らないところへ

凜は唇の端を強く真一文字に結んだまま、僕の視線を逃れるように立ち上がり、ゲートのフェンスに手をかけた。そして、

「そうよ。そうなの。その頃からなの、自分で自分を傷つけるようになったのは。」

気持ちよかった。学校で使っている事務用のカッターナイフを取り出して、自分の腕にその冷たい刃を沿わせる。ほんの少しだけ力を入れてその刃を引くと、薄っすらと赤い血が浮かび上がる。その血をじっと見つめていると、自分がいるこの場所が現実の場所ではないような錯覚に陥る。見慣れた自分の部屋。薄いピンクのカバーがかかったシングルベッドや、本や参考書が並んだ学習机。ソファに並べられた白いクマや犬のぬいぐるみや、そんなものが現実の世界とは切り離されてそこにたたずんでいる。そして、自分でつけた傷に痛みを感じる時、感じている間だけは、何も考えなくてもすむ。何も考えない、何も自分を悩ませない、何も自分を追い込んだりしない。

「そう、私はここにいていいんだ。私は普通なもの。何もおかしいことなんてないもの。そう思うんだけど、朝になって学校へ行つて、その子を見ると、またあの感情が私を襲ってくるの。あの子に触りたい。そして、どこかでいつも声が聞こえるの。」

「どんな？」

「おかしいのはお前だって。そういつも。」

凜は耳をふさいだ。

「そう。お前はおかしいんだって。」

そして、夜になると自室でひとりカッターナイフを手にする。その繰り返し。

「ある日。お母さんに見つかったのね。一緒に住んでいるんだもん。お母さんとふたりきりだもん。わかるわよね。当然。」

凜は自分の腕についた傷跡を指で撫でながら、続けた。

「お母さんはびっくりして、この傷は何なの？って聞いてきた。私は、お母さんならひよつとしてわかってくれるかもしれない、自分に変なんじゃないって言うてくれるかもしれないって思った。それで思い切ってすべて話してみたの。」

「それで。」

唇の端をぎゅっと噛み締めた彼女を見て、僕は言った。

「つらかったら無理に話さなくてもいいんだよ。」

「ううん。いいの。」

少し間をおいて、彼女は続けた。

「お母さんは、私のことを変だとは言わなかったわ。お母さんも中学生や高校生の頃、憧れていた女の先輩がいたって言ったわ。でもそれは、思春期特有の感情で、学校を卒業して初めて彼が出来て、それはそういう一時的なものなんだってわかったから、恋を知る前の女の子にはそういう感情を持つ時があるものだって。だから、凜もきつとそうなのよって。難しく考えたり悩んだりしなくても、時期が過ぎて、本当に好きな男の子が出来れば、解消する問題なんだって言ったわ。」

「そしてお母さんは、自分で傷をつけることにショックを受けて、こんなことはもうしないですって泣いたわ。お母さんがそういつて慰めてくれたのは嬉しかったけど、どこか見当違いっていうか、お母さんが言うような一時的な感情の問題じゃないって、私どこかでわかっていたのよ。何だか、寂しくて、苦しくて、大阪では自分の居場所がないような気がして、中学を卒業すると美容師の専門学校に入学する為に、大阪を離れたの。」

「お母さんと同じ道を？」

僕は聞いた。

「別にお母さんと同じ職業を選びたかったわけじゃないわ。ただ、地元の高校へ行きたくなかっただけ。どこでもいいから大阪を離れたかったのよ。」

「誰も知らない、誰もこんな私を知らないところへ行きたかったのよ。」

凜はつぶやいた。

24話 ゼロパーセントの確立

凜は立ち上がって、ゲートのフェンスに身体を持たせかけるようにして、遠く車が走る国道を眺めた。ドライブウェイのゲート前の水銀灯の明かりに照らされた彼女の表情は、何もかも失くし、途方にくれた迷い人のように、空ろで、ほんの僅かな気力も残っていないかのように落ち込んで見えた。

日中の照り返しの熱が、まだコンクリートの地面からほのかに立ち上がり、蒸し暑く、時折僅かに吹く風が慰め程度に肌を冷やす。

僕も同じように立ち上がると、ゲートから数メートル離れた自販機まで行き、ポケットの小銭を探る。手にふたつのペットボトルを持ち凜に渡すと、凜は僕に向かって微かに笑顔を向けた。

「ありがと。」

僕らはゲートに背を持たせかけたまま、黙ってペットボトルに口をつける。

「直人くん。今まで何人くらいの女の子とつきあったの。」

突拍子もない質問に僕はむせた。

「何、急に。」

「ごめん。普通どんなのかなって思ってた。」

「どうか。僕の経験が基準なのかどうかわからないよ。」

僕は付き合った女の子の数を頭の中で数えてみた。

少ないのかな。多いのかな。普通なのかな。

誠二のことを考えた。誠二かあ、あいつ両手で足りんのかな。もてるよな。何だかんだいってしょっちゅう女の子とデートしてるもんな。それに比べたら、僕って少ないよな。たぶん。

凜は考えている僕の顔を覗き込んだ。

「いや、いいじゃん。そんな数なんて。僕なんてそんなに付き合った子いないよ。」

僕はうろたえて早口でまくし立てた。

「直人くんだったら、優しいし、きっと何人が彼女さんいたんだろうな。」

凜は羨ましそうに目を細めた。

「私ね、翠が初めてだった。」

専門学校を卒業して、見習いで市内の美容院に就職した。そこで1年ほど勤めたあと、今の店に転職したらしい。そこで翠さんに出会ったわけだ。

「翠に会って初めて自分は一人じゃない。私みたいな人が他にもいるんだって。嬉しくて安心して、翠に夢中になったわ。」

初めての恋。僕にも経験がある。

夢中になった。人生初の春だった。

それに加えて、凜にとっては仲間に会えた喜びも会って、その翠さんとの恋は何物にも代えがたい大事なものだっただろうな。

だけど、だけど、ショックだった。彼女が好きなのは女の子。

それは、他に好きな男がいると告げられるよりも、ずっとずっと衝撃的で、立ち上がれないほどのショックだった。だって、他に好きなのは男なら、まだ張り合えることだって、凜を奪い取ることだってできる。だけど、相手が女ではなんともしようがない。

僕は男だ。女にはどう頑張ってもなれるはずもない。まったくのゼロパーセント。確率は。凜の恋人になれる確率は、ゼロだ。

だって、僕が男だってことが、もはやスタート地点から可能性はないのだから。

25話 永遠に恋人になれない

僕はそれから数日落ち込んでいた。

あの後、ゲートにもたれたまま、僕は凜の話の続きにずっと耳を傾けていたんだ。翠さんとの話。翠さんとの恋の始まり、蜜月、そして終わり。

聞きたいもんか。聞きたびに、凜の翠さんへの感情を耳にするたびに、深く傷ついた。こんな傷つき方って、何と表現していいのかわからない。

中学生のときに好きだった女の子。放課後、校庭の隅に呼び出された。もしかして告白でもされるのかと、期待に胸を躍らせて約束の時間にすっ飛んでいった。

だけど、違った。

当時、一番仲良くしていたつれに好きな女の子がいるのかどうか、教えてくれて話だった。

ああ、そうか。あいつが好きなんだ。彼女の上気させてた赤い頬を見て、一瞬にしてすべて悟った。

？さあ、どうかな。やつからそんな話聞いたことないから。？

そう言うと、

？直人くん。一番仲いいでしょ。教えて。彼、休みの日とか何してるのかな。メールとか聞いたら教えてくれるのかな。？

僕は答えられなかった。泣きそうな気持ちになった。何でこんなこと聞かれるんだろう。走って逃げたかった。でも、走り去るわけにはいかなかった。

？聞いてやるよ。メルアド。教えていいか。？

それだけやっというと、逃げるように彼女の元を走り去った。

そんな気持。逃げたいけど、逃げられない。一番聞きたくないこ

とを、何故かじつと聞いてあげなきゃいけない。どうしてだろ。僕だって傷ついているんだけど。凜は僕の気持を知っているんじゃないか。好きな女の子の好きな人の話なんて聞きたくもない。それが自分ならいいけど。自分じゃないんだから。どう頑張ったって、永遠に自分は凜の恋人にはなれないんだから。

「あのね、直。そんなところで伸びていられると営業の邪魔なんだけど。」

譲兄いの骨ばってじゃらじゃらと指輪で彩られた掌が、僕の頭を叩いた。

「痛いよ。」

「だから、邪魔なんだって。家帰って伸びてよ。」

譲兄い、今日は冷たい。

譲兄いの店、土曜日の午後ということもあって、お客さんで一杯だ。僕はカウンターに顎を寄せたまま、不機嫌な表情を隠そうともしせず、じろりと奥のボックス席の客層に視線を泳がせた。

26話 あの子とおんなじ

「マイカのママに、クリーニング屋の登美子さんたちでしょ。いいじゃん。常連さんばかりなんだから。僕がいたって気にしないよ。」

奥では、近所の商店街のおばさんたちがケーキセットを食べながら、おしゃべりに夢中になっていた。他のボックス席にも客がいたが、誰もふくれっつらでカウンターの隅でエスプレッソを啜っている僕になんか目もくれない。

「まあ、いいじゃない。直だつてがつくりきてるんだから。少しくらい。」

修一兄ちゃんが譲兄いにオーダーを伝えた後、そう言つて僕を慰めてくれた。

「お客さんひけたら、後で話し聞いてあげるから。」

修一兄ちゃんはいつものような優しい笑顔を残し、トレイにアイルグレイを乗せ、ホールへ戻っていく。

ドアに近いふたり掛けの席に、若い可愛らしい女の子がふたり座つていて、修一兄ちゃんに甘い視線を投げかけている。あの表情。あの笑顔。右側のチャコールグレイのワンピースを着た女の子が、隣の女の子に向かって嬉しそうに何やら話しかけている。視線は修一兄ちゃんの細い首筋にかかる長い髪の毛に釘付けた。

ああ、あの子、修一兄ちゃん狙いなんだ。

可愛そうに。ああ、何も知らないんだ。ここにいるサリーちゃんのパパのような髪型をしたこの変な親父とできてるなんて、きっと夢にも思いもしないんだろうな。

僕は、カウンターの向こうでサイフォンに豆をぶち込んでいる譲兄いの鼻の下の折り紙のような細い髭を見た。修一兄ちゃんは、細面の優しい雰囲気で、いかにも女の子受けしそうだ。お客さんの中には、修一兄ちゃん狙いでくる女の子もいる。

ああ、だけど、何も知らないで、可愛そうに。でも、それって僕

もそうだ。僕も一緒だ。

あの子と。あのワンピースの子と。

「ああ。」

「うるさいわね。何大声出してんのよ。」

譲兄いの鉄拳が飛んだ。

「いたつ。」

僕は反射的に手で譲兄いの拳を避けたが、避けきれず顔面にそのまま受けてしまった。

「で、何なのよ。」

「だって、譲兄い。僕ってホント間抜けなんだって嫌になってきたよ。」

「そんなの元からじゃない。で、何なのよ。」

そんな言い方しなくても。

「だって、あの女の子と僕と一緒にだって。」

譲兄いは、チャコールグレイに目を向けた。

はあん。彼は頷き、事のすべてを察したように、まあ、しようがないわねとつぶやいた。

「つまり、ビアンの子だって知らずに、恋してた自分の間抜けさかげんに愛想が尽きてるって感じ？」

そこまで言わなくても。

あの後、翠さんと一緒のアパートには帰りたくないと言いたくはないと泣いた凛をつれて、譲兄いの家を訪れた。だって、しょうがいなだろ。うちに連れてくるわけにいかないし、凛を連れてホテルに入るわけにもいかないだろ。もっとも、免許証もお財布も持ってないから無理だけど。

修一兄ちゃんが優しく凛の相手をしてくれて、譲兄いも泊めてあげると言ってくれたから、そのまま置いて帰った。帰ったら、牛乳は腐っているし、おかんが心配して起きてたから、またまた鉄拳の嵐だった。散々だ。

27話 人を好きになるのは

？ありがとうございました。？

譲兄いがカウンターから声を上げた。奥で陣取っていたおばちゃん連中がいつせいに帰還だ。

修一兄ちゃんが、ホールの片づけをしてカウンターへ戻ってきた。トレイからカップや皿を下げながら、

「何？真。お客さんもひいてきたし、話し聞くよ。」

ホールにチャコールグレイの彼女たちと、ドアの手前の席のカップル客の二組だけになって、店内は静かになった。低くジャズピアノの調べが心地よい空間を作っている。

修一兄ちゃんは、カウンターの隅の僕の隣に腰掛け、子供をあやすように僕の髪に触れる。髪の毛に触れるのは、どうも彼の癖のようだ。もっとも、誰にでも触れるわけじゃないと思うけど。僕は背中に、嫉妬なのか羨望なのか、何ともいえぬ視線を感じた。ああ、チャコールグレイの彼女だ。

僕はチラッと、後ろの様子を伺いながら、

「修一兄ちゃんは、僕のことを間抜けだと思う？」

「何で？」

「だって、凜は。」

「うん、わかつているよ。」

修一兄ちゃんは、また僕の髪の毛に手を伸ばす。

「人を好きになることは素敵なことだよ。そう思える人に出会えたことが幸せなんだ。結果がどうであれね。僕はそう思うけど。だから、決して直が間抜けだとか、この恋は無駄だったとか、そんなふうには思わないよ。」

優しい。修一兄ちゃんは優しい。チャコールグレイが惚れても最もだ。

「修一兄ちゃんは、こういうことってよくあるの。」

「ん？」

「つまり、ゲイだと知らずに恋してくる女の子たちに対してどうしてるのかってこと。」

譲兄いが口を出した。

そうそう。それぞれ。つまり凜イコール修一兄ちゃんだよ。

修一兄ちゃんは、しゃべり方も性格も優しいし、人当たりもいい。おまけに背も高く、ほっそりしてて10人中、10人がいい男だと思っイケメンだ。もてて不思議じゃない。それも女の子にだ。野郎にももてるのかな。

僕は不思議に思っ譲兄いの顔を見た。で、何でこんな親父が相手なんだろう。ま、それはいいとして。

「うん、確かにいろいろあったよ。」

修一兄ちゃんは、ちよつと考え込んだ後、言葉を選ぶように慎重に口を開いた。

「とても複雑なんだ。相手に対して申し訳ないという思いもあるし、残念だったり、悲しかったり。もう、一言では表せないよ。僕もかなり落ち込むし。」

修一兄ちゃんはそう言っ、大学生の頃の話をしてくれた。

28話 つらい思い出

同じサークルで知り合った女の子。価値観がよく似ていて共通の趣味もあったし、一緒にいて楽しすぎて、修一兄ちゃんはいつも彼女と行動を共にしていた。修一兄ちゃんは、彼女のことをとてもいい友達だと思ってつきあっていた。

「僕はこんなんだからさ。女の子のことを恋愛対象としてはなから見ていないから、あまり深く考えもせずに、その子と友達としてつきあっていた。彼女もそうだと思っていた。いや、思いたかったんだろ。本当は僕も気づいていたかもしれない。いや、気づいていても気づかない振りをしていた。」

ある日、飲みに行った帰り、彼女に抱きつかれてキスをされた。好きなんだと告白された。

「最初は彼女も、僕のことを友達として付き合い合ってくれていたらしいんだけど、途中から違う感情が芽生えてしまって、その思いに対してどうにもならなくなってきた。そして、ああいうことになってしまったんだ。」

修一兄ちゃんは当時を思い出してか、とても悲しそうに眉間に皺を寄せてカウンターの端に視線を落とした。

無理もない。僕だって凜のこと、友達でいいと覚悟を決めたけど、やっぱり一緒にいる時間が長くなればなるほど、自分の気持ちに嘘なんかつけないくなる。いっぱいいっぱいになって苦しくて、どうにもならなくなる。だから、修一兄ちゃんのその友達の気持ちもよくわかる。

「もし、自分がストレートだったら、こんな女性と付き合い合って結婚するんだろなって思うくらい、とてもいい子だった。本当に気が合って一緒にいると楽しくて、ずっと付き合っていたかった。本当にね。」

「難しいのよね。だったら最初から正体打ち明けてりゃいいのかっていうと、そういう問題でもないのよね。だれかれ構わず自分のカードって見せる？見せれないと思うわよ。」

譲兄いが口を挟んだ。修一兄ちゃんは、譲兄いの方へ顔を向けてため息をつき、

「だけど、それからは、僕は最初から言うことにした。僕はゲイだってね。」

「とても勇気があることだけど、もう悲しい思いをしたくないんだ。その子みたいに悲しい思いもさせたくないし。どうにもならないんだもの。僕だってストレートだったらその子と恋人としてつきあいたかったよ。そのくらい彼女を失うことが悲しいことだった。だけど、男が女になれないし、魚が空を飛ぶことも出来ない。そのくらいどうしようもないことなんだよ。僕が女性を愛せないってことは」

「修一兄ちゃんはすごいよ。僕だったら告白できない。」

「そうだね。大変なことだ。だけど、僕はその一方で自分のセクシヤリティを告白して、人を選んでいるんだなっと思う。この人は僕の味方だろうか、僕のことを理解してくれるだろうか。」

何だか難しい問題になってきた。修一兄ちゃんの核心にかかわる話題だ。僕、聞いていいんだろうか。でも、凜も同じことで同じように、修一兄ちゃんみたいに悩むんだろうか。悩んだんだろうか。

29話 自分のカードを見せる

その時、店のドアが開いて、お客さんが数人入って来た。

「いらっしやいませ。」

今までの深刻そうな表情を一瞬にして変えた修一兄ちゃんが、ホールへ去っていく。

残された僕は譲兄いに、話の続きを促す。

「で、どう思う。譲兄いは。」

「修一のこと？」

譲兄いはカップとソーサーを数セット棚から下ろし、お湯を張ったボウルの中で暖め始めた。

「ま、それもだけど、凜も同じように修一兄ちゃんみたいに悩むのかな。」

「直のことです？」

僕は頷いた。

「さあね。」

譲兄いはカップを拭きながら、僕の話に耳を傾ける。

「でもね、こないだあの子がうちに来たときに話をいろいろ聞いてて、思ったんだけど、あの子は直のこと感謝してるわよ。直と本当に友達でいたいんだと思うわよ。」

それがつらいんだってば。

「直がつらいのはわかるわよ。どうするかはあなた次第だけど、さつき修一も言ってたけど、確かに私たちは人を選んでいるかもしれない。この人は味方か、どうなのかって。自分のカードを見せることは信用しているからなのよ。怖いことでも勇気のいることなの。凜ちゃんもそうだと思うわ。直だから自分のことを話したんだと思うわよ。」

そうなのか。凜に信用されている。それはとても嬉しい。友達で

いれたらいい。だけど、もう友達でいるのが苦しい。やっぱり恋なんだから。この気持は恋なんだから。修一兄ちゃんの友達のように、離れていくしかないんだ。たぶん。

「特殊であればあるほど。自分の存在が少数派であればあるほど、理解を得ることは難しくなるわ。たくさんいっぱいある意見や物のほうがみんなに受け入れやすいでしょ。多数決と似ているわね。多数決で決まった意見の方がみんなに受け入れやすいし、理解されやすいでしょ。でもね、自分はこうであると、そのまま自分を表現できることはとても大事なことなの。それをひとりでもふたりでも、あなたはこういう人なんだね。あなたはあなたなんだねって、受け入れてくれる人がいたら、とても勇気が出るし、嬉しい。それに自分は自分のままでいいんだなって思ってた生きていけるって幸せなの。」

譲兄いはカップに珈琲を注ぎながらそう言った。

譲兄いの言うことはわかる。譲兄いがこの土地に店を開いたのは、僕が小学生の低学年の頃だった。譲兄いは昔からこんなだった。女言葉だし、変な格好してるし、普通の人には見えなかった。面白半分、興味半分で店に出入りする人は多少いたけど、あまりお客さんには恵まれなかった。この土地の人に受け入れられてなかったんだ。今は商店街の人や近所の人、いろんな人が出入りして、常連のお客さんもいっぱいいる。店の雰囲気が好きなのもいるけど、それよりも多くの人が譲兄いや修一兄ちゃんの人柄に惹かれて店に来ている。

だけど、昔はこんな順調じゃなかった。

そんな中でもいち早く、譲兄いと仲良くなって、店に出入りし始めたのがうちのおかんだった。おかんは昔から人を見かけで判断しないし、だれかれ構わず世話を焼くのが大好きだった。

根っから人が好きなんだよな。

おかんはいつも言ってた。あの店は珈琲も美味しいし、雰囲気もいい。何よりも譲ちゃんは面白くて、人に気遣いがよく出来るいい人だって。ああいう店は流行るのが普通なのにな。何とか、お客さんが増えればいいのにな。

おかんは自分の友達や知人を連れてあの店に通った。

僕だって最初は譲兄いが怖かったけど、接してみると全然優しいお兄さんだった。小学生の頃から本当に可愛がってもらった。

譲兄いは時々、おかんのことを話す。

直のお母さんはいいい人だって。ここに来て、最初に自分を理解してもらった人だって。

おかんは親父も巻き込んで、今では家族ぐるみでこの店の人たちと付き合っている。

30話 ネイティブアメリカンの話

「ネイティブアメリカンのこんな話を知っている？」

「どんな話？」

唐突に譲兄いは話を変えた。

「この世の中で、誰も自分のことを思ってくれずに、考えもしてくれなかったら、自分は消えてなくなってしまうんだって。」

「消えてなくなってしまう？」

「そうよ。怖い話でしょ。」

「それをネイティブアメリカンの人たちは信じているの？」

僕は想像してみた。

誰も僕を知らない。誰も僕のことを思わない。誰も僕のことを考えない。鏡を覗いてもそこには何も移らず、自分の意識さえも煙のように消えてなくなってしまうのだ。

僕はちよつと背筋が寒くなった。

自分はここにいて、自分の姿かたちは実際にあつて、自分という意識もちゃんとあるのに、誰もそれを意識してくれなくなったら、自分が望む望まないにかかわらず、自分はこの世から消えてなくなってしまう。

「怖いな。」

僕はつぶやいた。

「昔、若い頃よくそんなことを考えたわ。」

「譲兄いが？」

この図太そうな、ゴーイングマイウェイの親父にもそんな時期があつたのか。

「意外そうね。」

僕の表情を咄嗟に捉えて、彼は僕の耳を掴んだ。

「痛いよ。」

声を上げて微かに笑った後、譲兄いは言った。

「昔は自分に自信が全く持たなくてね。誰も私のことを認めてくれないって思ってたから、そんなネイティブアメリカンの話がずっと心に引っかかった。誰かが自分を認めてくれる、ここにいていいんだなって思うことが、現実自分が存在しているっていう意識に繋がるんじゃないかなってずっと思ってたのね。でも、それはある意味本当のことなのよ。誰かが自分を必要とし、そこにいていいんだよって言うてくれることって、自分の存在価値を確認することに繋がるからね。」

僕はふと凜の腕の傷を思い出した。

彼女も自分の存在価値を見いだせなくて、自分で自分を傷つけたのだろうか。誰も認めてくれない。自分ですら、自分のことを認められない。誰も自分を認めず、自分ですら認めなければ、煙のようにこの世界から自分は消えてしまう。ネイティブアメリカンのその話のように。

微かな蚯蚓腫れの赤い傷になった彼女の心の暗い淵の深さを考えてみた。

いつも明るく、自分というものをしっかりと持っているように見える譲兄いにも、そんな淵があるのだ。

31話 この気持ちは恋なんかじゃない

「だけど、自分を必要としてくれる人が増えるにつれ、そんな考えは浮かばないようになったわ。この土地で店を開いて、いつも足繁く通ってくれる人が増えるにつれ、そんなことは思わないようになったわ。そのひとり目が和子ちゃんね。直のお母さんよ。今でも感謝しているわ。」

「それと和子ちゃんは、何か自分のオリジナルティ、これは自分が自信を持ってるわよっていうものを作りなさいよって助言してくれたのよね。」

「それって、この店の看板メニューのこと？」
「そう。」

あのさくらんぼのケーキだ。オープンしたての頃からの看板メニュー。味もレシピも何も変わらない。譲兄いがひとりやってた頃からの看板メニュー。修一兄ちゃんほどの腕はないけど、譲兄いが作るケーキは、素朴でどこか懐かしい味がして、飽くことがなく虜になる。

店がまた賑わい始めた。修一兄ちゃんが忙しそうにホールを何度も行ったり来たりしている。譲兄いも僕とのおしゃべりを中断してお客さんの注文をさばくのに集中している。

これ以上店にいても邪魔になるだけだしと思い、腰を上げると、
「これ。直持つてきな。」

譲兄いはカウンターの下から、ケーキの箱を取り出した。

「悪いな。ケーキまで。」

「あんたにじゃないわよ。凜ちゃんに持って行って。今朝、作ったばかりだから。」

「え、凜に。」

「こないだ、私のさくらんぼのケーキ食べたってあの子言ってた

からね。」

僕は箱をぶら下げて突っ立ったまま、

「これ、早く持ってかないと腐るよね？」

「何、当たり前のこと聞いてんのよ。」

あれから、凜に会いたい気持を抱えたまま、うだうだと日々を送っている僕のことを、譲兄いは知っているんだ。会いたい。でも会えない。会ってどうするんだ。もう友達でいられない。友達なんて嫌だ。だけど恋人になれるわけもない。じゃあ、無駄だ。無意味だ。だけど、会いたい。

その繰り返し。その繰り返し。

意味のない思考の羅列。縛り続けられて動けない。バカな自分。

箱を抱えたまま、店を出た。

修一兄ちゃんが、トレイで塞がっている手の反対の手で、僕の肩を一瞬抱いた。

小さく耳元で、？先のことなんかわかんない。今の気持を大事にして。？と言った。

？やっぱり会いたい。？

ネイティブアメリカンの話が気になった。

凜も誰にも認められず、自分にさえも疎まれて、自分は消えていくのだろつと、あの傷をつけたのだろつ。そう思うと、無性に凜に会いたくなった。どんなことがあっても、どんな状況に置かれたって、絶対君は一人じゃないんだ。そう言ってあげたかった。それだけいい。僕の役割はただそれだけでも、それでいいんだ。

恋じゃなくても。

そう、この気持は恋なんかじゃない。

32話 迷ってなんかいられない

気がつくともう季節は秋になっていた。

あの最後に凜に会った夜。

むっとする熱気が、真夜中を過ぎてもおアスファルトの地面から生き物のように這い上がり、僕らの身体にまとわりついた。あの暑さがまるで嘘のように、季節は半袖のシャツの腕を肌寒く感じさせるようになっていた。

僕は真っ直ぐ、いや、迷い迷い、駅前の商店街の路地を右往左往しながら、凜の勤める美容室へ向かってみた。歩をそちらの方向に向けながらも、まだ気持は迷っていた。凜に会うべきか会わずに帰るべきか。いや、このケーキはどうしたもんか。

あれから、彼女から何度かメールをもらった。話題はたわいもないものだけど。

元気でいるのかとか、今度またご飯でも食べようとか、そんな内容。

僕は返事をしなければと思いつつも、どこかいろんな思いを引っ掛けたままで、フラップを開けては閉じ、開けては閉じを繰り返して知らぬ間に日が経っていた。日にちが経てば立つほど、返事など今更出来もせず。

だから、凜に電話をしたり、アパートに向かったりなど出来なかった。

せめて、通りの向こう側から店のウィンドを覗いてみようかと思いついたわけだ。

凜の美容室へ向かう道の途中に、例の翠さんが引き抜かれたという美容室があった。オープン間もなく、まだ店先に大小色とりどりの胡蝶蘭やシンピジウムの鉢植えが所狭しと並んでいた。

黒とシルバーを基調にしたメタリックな冷たい感じのする店内の

窓越しに、翠さんのストレートの黒髪が揺れているのが見えた。きびきびと忙しく立ち動く様は、いかにも仕事に熱中し、充実した時を過ごしているキャリアウーマンの姿だった。

僕はそれをどこか醒めた目で見た。横目でホンの数秒ちらりと意識を向けただけで、足早に通り過ぎた。

凜の美容室が見えてきた。

初めてこの店に来た時。仕事の途中で、会社の名前入りのバンを店先に止めたまま、薄汚い作業着でこのドアを押したっけ。

あれからそんなに月日が過ぎたわけじゃないのに、何故かとても長い時間が過ぎていたような気がする。僕はそのドアを、あの時みたいに勢いよく押すことが出来ない。

また、店の前をうろつくと迷い犬のように歩き回り、すぐ前にある本屋の軒先で読みたくもない雑誌を立ち読みする振りをして、気持を決めかねていた。

すると、店先に凜の同僚の子が出てきた。店先のポスターを張り替えるらしい。腕に何枚かのポスターらしきものを抱えている。

チャンス。

「あの。」

店まで走っていき、その子に声をかけると、

「あら。西脇さんのお友達ね。」

僕を覚えてくれた。

「あの、凜ちゃんいるかな。」

「あら。」

彼女は小首を傾げて不思議そうな顔をした。

「西脇さんならこないだ辞めたわよ。」

「え。そうなの。」

僕は知らなかった。

友達なのに知らなかったの？というような表情をした彼女に、お

礼を言いその場を後にした。

？オーナーが用意したマンションに移るって、翠。？

？じゃあ、凜はあのアパートに住み続けるのか。？

？でもね、翠と一緒に過ごしたところにひとりでいるってのもね。？

僕はあの夜の会話を思い出していた。

凜は翠さんと一緒に住んでいたけど、翠さんは引き抜かれた店のオーナーに、住む場所も用意してもらっていた。凜を置いて出て行くって。

でも、凜もあのアパートにはずっと住み続けるつもりはないって言ってた。

店も辞めて、あのアパートも引越していたら。もう、凜に会えない。

急に気が焦ってきた。

会おうか、会おまいか。

そっという問題じゃなくなってきたぞ。

ひょっとして、このまま会えないのか？もう、引越してたらどうしよう。

足早に駅前の通りを過ぎ、路肩に止めてある車を取りに行く。ハンドルを握り、真っ直ぐ凜のアパートへ向かう。もう、迷ってなかった。

33話 引越し

「あれ、直人くん。」

部屋一杯に積み上げられたダンボールの向こう側で、凧が素っ頓狂な声を上げた。

「びっくりした。誰かと思っちゃった。」

エプロンをつけ、頭にバンダナを巻いた凧が、玄関先に出てきた階段を上がったところで、凧の部屋の扉が開きっぱなしになっているのを見て、僕がドア越しに中を覗き込んだら、凧が部屋の真ん中で、荷物の整理に精を出しているのが見えたんだ。

「引越し？」

「うん。」

そう頷いた彼女は、どこか吹っ切れた様子で、さばさばとした笑顔で浮かべていた。

「だって、引越しするからってメール入れたのに、直人君から何にも返事ないし、その前にも何度かメールしたのにやっぱり返事ないし、あれ、嫌われちゃったかなあって、ちょっと落ち込んでたんだよ。」

凧は、荷物の整理を再開しながら、こちらに背を向けて恨み言をつぶやいた。

「え、引越しするってメールは来てなかったよ。」

なぜかな。何か通信の異常かな。そんな内容のメールは届いていなかった。

だけど、それ以前にいくつかもらったメールには確かに返事をしていたなかった。そのことを素直に謝ると、

「別にいいけど。だって、何とか引越す前に会えたしね。」
凧は笑った。

僕は横に座って、荷物を取ってやつたり、本や雑誌を紐で縛ったりしながら聞いた。

「引越すって、どこへ？店も辞めちゃったんだな。さっき店に行ったら、辞めたって言われてびっくりした。」

「うん。大阪へ戻ろうと思うの。」

大阪へ。実家にか。

「お母さんが帰ってきて欲しいって。いろいろ考えたんだけど、店をお母さんの代で終わらせちゃうのも勿体無いし、せっかく私も美容師の仕事してるしね。」

翠さんが新しい店に勤めだして、このアパートから出て行き、凛はこのアパートにひとり残った。ここにはいろんな思い出があって、その空間にひとり取り残されていることは、僕だって想像したけど、苦しいことだろうなって思う。翠さんのことを思い出しちゃうし、どうしてこんなことになったんだろうとか、彼女のことを恨んだり、自分を卑下したりしちゃうんだろうなって、容易に想像できた。だから、住む場所を引っ越すっていう発想はわかるし、翠さんと一緒にあった店を辞めて心機一転するっていう考えもわかるし、けど、まさか地元へ帰るとは思わなかった。

この町からは、新幹線で数時間。容易に会えるような距離じゃない。

がっかりした。いや、膝から力が抜けるような感覚だ。

もう気力ゼロって感じ。

僕の落ち込んだ様子を見て取ってか、凛が明るく、

「あ、この箱何？」

僕が持ってきたケーキの箱を指差した。

「ああ。譲兄いのケーキだよ。凛が食べたいって言ってたからって、持たせてくれたんだ。」

そう言くと、凛は引越しの荷物が詰まった箱が積み上げられたフロアリングの空間を見直し、

「ちょうどお茶の時間よね。ああ、食べたいけど、もうガスも止められちゃったし、お茶も沸かせないわ。」

「って、もう今日引越し？ガスも止めてあるって？」

「え、もう今日引越しちゃうってこと？ガスも水道ももう止めてあるの？」

「そうね。あ、いい考えがある。下のスタバでコーヒーをテイクアウトして、あの展望台まで行かない？そこで景色を眺めながらケーキ食べようよ。」

僕の質問には答えず、お茶する場所を彼女は提案してきた。

このアパートの下には、スターバックスがテナントで入っている。「あの展望台？」

「うん。こないだゲートが閉まってていけなかったとこ。私あの展望台からの景色、好きなんだよね。前に昼間に登った時、こんな景色がいいんだってびっくりしちゃった。夜の夜景もいいけど、明るい時の眺めも最高よ。」

明るいんだ。明るいとさらに高さが実感できる。

高所恐怖症の僕は咄嗟にそう思った。夜の暗闇なら、自分がどの高さにいるのか視覚的にはまだ曖昧にこまかされるような気がする。ちよつと腰が引けた。

「いや、それなら下のスタバでコーヒー買ってくるよ。外じゃなくてもこの部屋でもいいじゃない。」

そう反論したけど、凜はすでにエプロンをはずし、Ｔシャツの上にカーティガンを羽織って部屋の鍵を手にした。

「あそこまですぐよ。さ、行こ。直人くん。」

丸く切りそろえられた茶褐色のボブの毛先が、彼女の動きに合わせて揺れた。それを見てまた胸の奥が音を立てている自分を感じた。やはり、凜にはかなわない。

34話 気持ちの整理がつかなくて

「ほら、凄くいい景色。来て良かったでしょ。」

僕は足がすくんで下を見下ろせない。だけどそれを気づかれぬよう、さりげなく

「そうだね。でも、風が強いからこっちで食べようよ。」

そう言っ、東屋の下に席を取る。

素直に凜はこちらへやってきて、丸太で出来た腰掛の上に腰をかける。

「美味しそう。」

箱を開けた凜は、ケーキに乗ったさくらんぼを手に取り、口に含む。

彼女のグロスで彩られたふつくらとした艶のある唇に、そつと気づかれぬように視線を泳がす。

もつ、会えないのか。

ケーキをスタバでもらったコーヒーマドラーで突きながら、ため息をつく。

「どうしたの。」

「え。」

ケーキ。食べようよ。

彼女は指差す。その白い生クリームたっぷりに彩られた甘い物体に。

「で、さっきの話の続きだけど。今日行っちゃうの？大阪。」

「ああ、うん。そうね。荷物は夕方、引越し屋さんがとりに来るから、それを見届けてから新幹線で帰るつもり。」

じゃあ、今日来なかったら、凜とはもう会えなかったのか。

「もつ、会えないのか。」

「直人くんに連絡取りたかったの。引越すことも知らせたかったし。だけど何回メールしてもレスないし。こないだのこととか、ま
ずかったのかなって思って、怖くて。」

凜は急に声のトーンを落とした。

ごめん。レスしない自分が悪いんだ。

そう。決定的に友人にしかねない身の上を嘆くのに精一杯で、
凜の気持ちまで考えてあげなかったのかもしれない。

「まずいなんてこと。うまく言えないんだけど、いろんなことがご
ちやごちやで、自分の気持の整理が出来なくて。だから凜に会えな
くて。」

僕はやっそう言った。

だって、本当はまだ気持の整理がつかなくて、今日だって、譲兄
いに背中を押されるようにして、彼女に会いに来たけど、会ったか
らって、会って彼女に何て言っていかわからなかったし、今後彼
女とどうしていききたいのかとか、何も考えつかなかった。

？このケーキ美味しいね。？とか、？譲さんも修一さんもとても
いい人ね。？とか、？私が店を辞めてこの先どうしようかと迷ってい
たら、大阪のお母さんが一度帰ってきたらって言うててね。？とか、
そんな、僕にしたら事のコアをはずすようなニュアンスの話を、凜
はぼつぽつと話し始めた。

だけど僕は凜の話に相槌を打つだけで、何を話していいのか、う
まく言葉が見つからなかった。

ケーキを食べ終わって手持ち無沙汰になった僕は、席を立てて、
展望台の下まで行ってみた。

登ってみようか。

ふいにそんな気持になった。

35話 気持を伝えたい

展望台の階段に足をかけて、思いきって早足で階段を駆け上がる。ほんの数メートルしかない高さの展望台だが、高所恐怖症の僕にとっては、勇気のいることだった。

展望台の上から、下の景色を眺めてみた。高台にある場所から、さらにその上へ上がってきたことなんて初めてだ。眺める景色の中に、ゴマ粒みたいに小さな車が道を右往左往と走り、やっぱり小さなマツチ箱みたいな家や工場が立ち並び、遙か向こうの方には山が連なり、雲なのか、靄なのか、白い膜のようなものが、山の上にかかっている。

初めてだ。まともに高台の上から景色を眺めたことなんて。

凜と一緒にあのタワーに登った時も、下の景色なんてまともに見ていなかった。無理に視線を遠くに向けるような振りをしながら、本当は自分の手元を見ていた。

怖かったから。

そう、自分の気持を言うこと。それによって相手の反応がどう返ってくるのかわからないこと。それを受け止めること。僕が苦手とすること。

自分の気持を伝える勇気がない。だから、今もって、女の子に告白したことがない。紹介されて何となく付き合ってみたとか、相手の子から告白されて、何となく流されて付き合ってみたとか、そんなんばかり。

本当に好きになって、本当に勇気を出して、気持を伝えたことってないんじゃないか。

もつとも、そこまで思える相手に今まで出会えなかったということも原因だけど。

だから、凜に会った時、この子だって思った。だから、恥ずかし

くても何でも、凜にアタックしたんだ。だからこそ、凜の恋人が女の子だったこと。同性が好きだということ。知ったときのショック。永遠に手が届かない子だってわかったこと。

だけど、もっとショックだったことは、凜の腕の傷。

「どうしたの。」

凜が展望台に上がってきた。

「ああ、景色眺めてみようかなって。」

「直人くん。高いところ苦手なんじゃないの。」

え、知ってたの。

凜は、目じりを細めて、笑みを浮かべ、

「ふふ。タワーに登ったとき、直人君の視線が宙に浮いてたの見て、高いところ苦手なのかなって疑ってたの。」

？大丈夫？？

凜は僕のすぐ横に来て、囁いた。

「大丈夫だよ。」

凜は今日も薄い長袖のシャツを着ている。僕はそのシャツの袖に隠された薄い桃色の蚯蚓腫れの傷のことを思った。

夏とは明らかに違う澄んだ秋の風が、展望台に立つ僕らの間を吹き抜けていった。

「あのさ。」

「うん。」

凜は微笑を浮かべ、僕の目を見た。

「このまま君が大阪へ帰っちゃって、もう会えないのかと思ったり、いや、思いたくないし、そうしたいわけじゃないけど、でも、もしかして今言わないと、もう絶対言えないかもしれないし。」

何言ってるんだ。自分は。

凜はきょとんとした顔で僕を見ている。

何言おうとしてるんだ。

鼓動が早くなる。頭に血が上っているみたいだ、顔が熱い。

いや、でもここで言わないともう二度と言うチャンスはないかもしれない。

凜はこのまま大阪へ行ってしまう。友達なら又会えるかもしれないけど、だけど自分の気持ちを隠したままもう彼女と会えない。もし駄目になっても、もう凜に会えなくなっても、だけど自分の気持ちを知ってほしい。自分がしたかったことってやはりこれなんだ。自分の気持ちを伝えたい。

腹に力をこめた。

「友達でって言ってたけど、だけど本当は凜のことが・・・」
そう言った途端。

甘い果物のような香りが鼻腔の奥を通り抜けた。

36話 ふたりで見る景色

凜の柔らかい毛先が頬に触れた。

彼女の柔らかい腕が僕の首に回された。

僕を抱きしめた腕に力をこめながら、

「お願い。直人くん。言わないで。」

凜の声が震えていた。

「聞いてしまうと友達でいられなくなる。ごめんね。私わがままだよね。」

「わかってた。わかってたけど知らん顔してた。だって、直人君といつまでも友達でいたかったから。ずっと。」

彼女の柔らかい体の感触を感じながら、苦しくなった。

「ここへ来て初めて。ううん。大阪にいるときも誰にも心を開くことが出来なかったわ。お母さんにも。だけど、直人君は受け止めてくれたの。私のこと。直人君になら気負わずに素直に自分を見せることが出来る。ずっとそう感じていた。あの夜も、直人君に会わなかったら言わないままだったかもしれないけど、本当の私のことを話すことが出来た。あの後、直人君から連絡なかったままだったけど、私、直人君に本当のこと言っつて、言えて良かったって思っつた。どこかで、直人君は私のこと受け止めてくれてるって信じてたのね。こんなふうに思うの、本当初めて。だからこそ、直人君を失いたくない。恋人にはなれないけど。」

少し沈黙があつたあと、凜は苦しそうにつぶやいた。

「私、わがままだよね。」

「いや。」

口の中がからからに乾いて、やっとのことで口を開いた。

凜は続けた。

「いつも自分に自信がなくて、どこにも自分の居場所なんてないんだって。あきらめて、自分で自分を卑下してて、そして何でも斜め

に、素直に真つ直ぐに見れなくて、自分のことが嫌で、消えてなくなりたいて思う時も一杯あつて。だけど、直人君と友達になつてから本当楽しくて。ちよつとだけど、自分に自信持てるようになって、直人君という時は、消えなくてもいいんだって、ここにいていいんだって思えるようになって。」

凜が僕のことをそんなふうに思つてたなんて、知らなかった。僕は友達面して、下心一杯だったのに。本当は。何だか自分の方が恥ずかしくて、消えてなくなりたかった。だけど、心とは裏腹に身体が痺れたように熱くて、下半身に全部血がいつちやつたような感じだったんだ。ちようど、彼女のお腹の辺りにその感触は伝わっているはず。何だか情けない感じだった。そして、僕の腕は凜に羽交い絞めされたので、ぶらりと力なく下がつて。本当は腕一杯に彼女を抱きしめたかった。

ただどこで彼女を抱きしめたら。もう平常心でいらなくなる。僕はやはり又腹に力を入れて、手で彼女の肩を押し戻した。

少し興奮したように頬を赤く上気させた彼女の目は少し潤んでいた。

その表情が素直で可愛らしいと思つた。初めて出会つた時の、斜に構えたクールな影はもはや消えてなくなっていた。

「そんなふう to 思つてくれてたんだ。嬉しいよ。凜の役に立てたんなら。」

展望台の下を強い風が通り過ぎ、草が靡くように音を立てた。

僕はふと、譲兄い that 言つていたネイティブアメリカンの話を思い出した。

「あの、これ譲兄いから聞いたんだけど。」

そう言つて話始めると、

「誰かの思いが自分を創つてゐるってことなのかしら。不思議だね。でも何だかそう考えるとほっとするわ。」

凜はそう言つた。

「自分を創っているっていうか、元々自分は自分で存在するんだよ。だけど、人は一人では生きられない。どこかで、誰かと、いろんな人と繋がっている。そして、その繋がりの中で自分の存在を意識するんだと思うよ。」

僕はそう話しながら、おかんやおとん、お姉や、譲兄い、修一兄ちゃん、誠二、会社の皆、釣り仲間のやつらや、いろんな人の顔が頭の中に浮かんでいた。

遠くの景色にじっと視線を動かぬようにしたまま聞いていた凜の頭の中にも、いろんな人の顔が浮かんでいるんだろうと思った。

僕は凜の肩に手をかけた。

「今日、鏡見た？」

「見たわ。」

「いただろう。」

僕の言葉の意味がわかってか、凜は軽く口の端をあげてみせた。

「その中に僕もいるよ。いつも。」

そうとしか言えなかった。

だけど、自分の想いはきつと伝わっている。

展望台から頭を出して、大きく息を吸った。

透き通った涼やかな空気が肺一杯に吸い込まれて、気分がすつとした。

凜も隣で同じように真似をしている。

そして、僕の顔を見て笑った。

「いつか、大阪に遊びに来て。通天閣登ろうよ。」
黙って頷いた。

そう。そうだね。恋人同士じゃ登れないけど、僕等なら登れるよな。

この気持は恋なんかじゃないんだから。
僕の目に映る世界が滲んだ。

水のフィルターがかかるように、展望台から見える山も道もマツチ箱のような家やおもちゃのように走る車も、少しずつ滲んで揺れていた。

鏡の中に君がいる。

自信がなくて自分が嫌でたまらなくて、消えてなくなりたいと思う夜も。

想う人に思いが伝わらなくて、胸が塞ぎこんでしまう日も。

先が見えなくて、希望が持てず、起きるのが億劫な朝も。

鏡をこらん。そこに君がいるから。

それは、誰かがこの世界で君のことを思っている。君のことを考えている。

だから、君は消えない。鏡を見てこらん。消えてなくなったりしないから。

どこにいても、君のことを思っている。君のことを考えている。

だから君は消えない。僕がこの世界で、この胸のどこかで、君を抱きしめる。だから、君は消えない。

鏡を覗いてこらん。そこに君はいるから。自信を持って、君を思う人たちがいることを確信して。そして前に。少しずつでも先へ進んでいこう。

37話 葉書

「直人、電話よ。」

おかんのほかでかい声が浴室のドアの向こうに聞こえた。

「誰？」

シャワーを止めて、返事を返すと、

「誠二くん。」

「今日のコンパのことだよ。聞いて。」

おい。間の延びた返事の後、おかんはいつもの調子で誠二と話し出す。

おかんの甲高い声を背にして、扉を閉めるとシャワーのコックを再び捻る。

今夜の店の場所のことだろう。

後で電話してって、言っと思ったんだ。会社を出る時。誠二の背中に向かつて。

金曜日の夜。直行で仕事から帰り、汚れた作業着を洗濯機に突っ込み、シャワーへ飛び込む。急がないと。待ち合わせ時間に合わない。バスタオルを巻いて浴室のドアを開けると、廊下に立っていたおかんにぶつかりそうになる。

「なんでそんなとこ立ってんだよ。危ないだろ。」

「だって、あんたが電話聞いといっって言ったから、待ってたんだけど。」

おかんは頬を膨らませた。

「すまん。で、誠二何て。」

おかんは駅前の最近出来たばかりの居酒屋の名前を告げた。

「わかった。ありがと。」

そのまま二階の自室に駆け上がろうとすると、おかんが僕の腕を掴んだ。

「寒っ。なんて冷たい手してんだよ。」

湯気が出ている腕に、おかんの手のひんやりとした感触が堪えた。
「これ。直に来てたよ。」

おかんの手に一枚の葉書が。

あ、凜だ。ちらつと見た宛名に大阪の消し印が。葉書くれたんだ。
嬉しくて、口元が緩むのが自分でもわかった。

「直。あんた今日コンパなんだって。」

「何で知ってんの。」

葉書から顔を上げると、

「だって誠二くんがそう言ってたもん。」

そんなことまでおかに言っなよ。誠二は。

誠二もだけど、おかんは僕の友達と仲が良い。何でも根掘り葉掘り聞くんだから。嫌になっちゃう。それを言っとおかんは、直がいるんなことあんまりお母さんに話してくれないからわからないので、連れに聞くんだって言う。

すると、ふいに、

「もう、凜ちゃんのことはいいんだ。吹っ切れたの。」

葉書を手にして自室に上がるうとして、はっとして振り返る。

「何それ。」

「ふられたんだって。」

「不可抗力だ。」

振られるも何も、それ以前の問題だろ。そんなの。

っていうか、なんでおかんがそんなこと知ってるんだ。おかんがにんまりして僕の顔を見ている。

「何で知ってんの。」

「譲ちゃんから聞いた。」

なんだそれ。譲兄いも言っなよ。そんなこと。

何かつこ悪いな。

気まずい気分でおかんの顔を見ると、

「まあ、いろいろあるって。若いうちは。良かったじゃない。いろんな経験が出来て。」

つらい思いも切ない思いも体験できるって貴重なことだって。そうやって自分の中にいろんな引き出しを積み重ねて持っている、いいんだって。いろんな思いをしているんな経験をしたぶん、人の気持がわかる人間になれるからだって。

おかんはよくそんな話をする。僕は今まで聞いて聞かない振りしてたけど、何だか凜の一件があってからおかんの言うことも少しわかるような気がしてきた。

ああ、とか、うんとか返事を濁しながら階段に足をかけると、

「今日は頑張れ。いい子いるといいねえ。」

おどけた調子で言ったおかんの言葉が、背中にむずがゆかった。

38話 また会う時まで

髪の毛にドライヤーをかけながら、彼女からきた葉書を見る。
ビリケンさんだ。

裏には通天閣の名物、ビリケンさんのどアップの写真が移っている。

？直人くん。元気ですか。凜は元気でやっていますよ。大阪へ戻ってきてから、お母さんの店を手伝っています。昔からの常連さんや、親戚の叔母さんやいろんな懐かしい人に囲まれて、結構楽しくやっています。何だかんだいっても地元はやっぱりいいね。先日、久しぶりに通天閣に登って来ました。悲しいことや嫌なことがあったんじゃないよ。久しぶりに高台から大阪の町の風景を見たかったら。通天閣に登ったら、何だか無性に直人くんに会いたくなってしまいました。いろいろ凜のわがママを聞いてくれてありがとう。ホントに今度大阪へ遊びに来てください。待っています？

通天閣でこの葉書を買って、送ってくれたんだな。

僕の気持はまだ整理しきれてはいない。

一度好きになった子と、友達としてまた付き合っていけるのか、今の僕にはわからない。だけど、凜が地元で元気にやっているのを知って嬉しい。

また会いたい。

やっぱり会いたい。

だけど、それまでに気持を整理しておかないとな。

頭にバスタオルをかぶったまま、小さな波が胸の中の海を行ったり来たりする、くすぐったいような、嬉しさとも愛おしさともわからない気持に浸っていた。

葉書をひっくり返し、彼女の可愛らしい小さな丸い字を何度も眼

で追っていると、携帯の画面が青く光った。

あ、誠二だ。

？早くしろ。もうメンツは揃ってるぞ。？

語尾に怒った顔マーク。

いかん、いかん。急がないと。誠二に可愛い子ちゃん、全部持てかれそうだ。

僕はビリケンさんの葉書を大事に机の上に立てかけた。そして胸の中でそつと呟いた。

？行ってくるよ。凜。？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418r/>

この気持ちは恋なんかじゃない

2011年8月2日22時21分発行